間もなく、この時の裁定が破談となり、またまた内済人が入って調停した。「村方一統不承知ながら事済み仕り候」となったのは同年六月のことであった。しかし、内容について「委細の儀は添状に印し置き候」とあるが、その添状が残っていないので詳細なことは分からない。

この件に関しては、長砂村に残っている「志谷山内済口記帳」（長砂区有文書）に基づいて記述したので、表現がどうても長砂村中心になったことを断っておく。

写真275　「志谷山内済口記帳」
（長砂区蔵）

第三節　近世出石の文化

1　宗　教

沢庵和尚の生いたち

近世の名僧中、大衆に最も敬愛される偉大な禅僧沢庵和尚は、一五七三年（天正元）一二月朔日出石城下に生まれた。山名氏の此隅山城が有子山に移城する前年である。姓は平氏、三浦介義明の子孫で中世に関東から但馬に移り住み、累代山名氏に仕えて秋庭氏を称した。父は山名祐豊の家臣秋庭能登守綱典（法名雲峯以閑居士・一六〇六年一一月一五日没）、母は枚田氏の出で（法名浄徹妙清大姉・一六〇七年四月一三日没）、兄があり半兵衛真典といった（沢庵の「中興和尚法度」中に俗兄半兵衛とあり、正保二年編の「旅枕」の序にも兄の秋庭氏半兵衛殿へつかわされたものを写すとある。一六〇七年に父母の碑を宗鏡寺塔頭勝福寺内に建て、一六三四年には先祖の開基した出石如来堂を再興している）。

茶人武野紹鷗の孫、武野宗朝の撰した『東海和尚紀年録』によれば、「和尚は、天正元年癸酉一二月朔日但州出石邑に生まれた。占者が見て、この児が道に志せば必ず大成すると。そこで父母は出家を考え、和尚が七歳の時父が和尚をつれて宗鏡禅寺に行き、正受院の周嶽西堂に謁して、一〇歳になれば必ず老師につい

て出家をさすと約束ができた。これを聞いた太守の山名宗詮（祐豊）は恵日山（東福寺）の哲惟杏（惟杏永哲）を招いて授戒の師としようと喜んだ。しかし、間もない翌年には織田信長に派遣された羽柴秀吉の攻略に会い、山名氏は敗北して因幡に出奔した。そのためやむなく一〇歳で城下の浄土宗唱念寺（現昌念寺）に入り、剃髪して名を春翁といった」とある。

沢庵の生まれたころは、名門の但馬山名氏も最末の時期で、一五七七年（天正五）は第一次の但馬征伐が行われ、羽柴秀吉によって山口・竹田の諸城が落とされ、次いで一五八〇年（天正八）の第二次の但馬征伐には、築城間もない山名氏の本拠有子山城も攻略されて城主氏政は因幡に脱出し、沢庵の出家を約した隠居の祐豊は、城に留まって間もなく死去したといわれる。このように、転変する戦国の乱世下に生まれた沢庵の出家は、主家山名氏滅亡の二年後で、山名家臣であった父綱典の立場とも無縁ではなかったとも考えられる。『紀年録』にいう祐豊との禅門への出家の約束はつぶれ、最初に入門したのは浄土宗唱念寺の衆誉上人のもとであった。沢庵は一四歳でこの寺を出て禅門に転じ、宗鏡寺塔頭勝福寺に移って、希先西堂（妙心寺派亀年禅愉の法孫）に就き、名を「秀喜」と改めた（『紀年録』）。一九歳のとき師希先西堂の死に会い、翌一五九二年（文禄元）に太守の前野長康が宗鏡寺に招いた大徳寺長老董甫宗仲禅師に参禅した。二二歳のとき禅師の帰洛に従って京に

写真276　昌念寺本堂

上り、大徳寺塔頭三玄院にとどまって、春屋宗園（円鑑国師）に師事して名を宗彭と改めた。二七歳のとき石田三成が近江佐和山に瑞嶽寺を建て、春屋が開堂（大寺の住持となった僧が、最初に行う行事）したのでこれに従い、次いで董甫がその住持となったのでこれに随侍した。

翌年二八歳で帰洛して三玄院の小室に居たが衣食を欠くほどで、蔵書を売って一鉢の用にあてる貧しい生活であった。翌々年四月に董甫が示寂（僧が死ぬこと）したので、京を去って堺に赴き、大安寺に寓居していた建仁寺派の学僧文西西堂（諱は洞仁、儒学と詩文に長じた）に就いて儒学、ことに詩文を学び、それ以後、沢庵の筆まめな多くの著作が始まったといわれる。このころ『紀年録』の慶長七年六月の項に「海会寺に仏事があり、沢庵もこれに招かれたが、一枚きりの衣が汚れていたので前夜に洗濯して月下に干しておいた。翌朝になって同行の僧が誘いに訪れて戸をたたいたが、沢庵は裸で着るものもないため、戸を閉じたまま会わずにその乾くのを待って参会した」という有名な逸話が記されており、修業時代の生活の一端をよく伝えている。

一六〇三年（慶長八）には師の文西が入寂（僧が死ぬこと）し、同じ堺の陽春庵にいた名僧一凍紹滴（古鏡禅師）に参じ、翌年三二歳の八月四日に印可（弟子が法を継いだ事を師匠が証明すること）と「沢庵」の号を授かり、その法嗣となった。純一で終世名利をしりぞけた沢庵は、先に参じた春屋宗園の華麗な活躍より、一凍の枯淡で質実な禅風を求めたものといわれる。

大徳寺出世と投渕軒時代

一凍の印可を受け禅僧として一家をなした沢庵は、一六〇七年（慶長一二）には大徳寺首座に任じて塔頭徳禅寺に住し、堺の南宗寺にも住持した。同年三月、大徳寺に奉勅入寺して

第一五四世となり、出世開堂三日で「由来吾是水雲身」として堺に帰った。その後、沢庵を招請する貴顕が多く、一六一一年（慶長一六）には豊臣秀頼が大坂城に召したが固辞し、細川忠興が寺を豊前に建て住持として招請したが応じなかった。また翌年には和歌山藩主浅野幸長が堺に赴いて沢庵に会うことを請うたが、これを大安寺に避けている。このように権勢者の招請を拒否した沢庵も、近衛信尹（のぶただ）が大仙院に訪れたときは、これを受け入れ、「詠歌大概音義」一巻を撰して贈った。一六一三年（慶長一八）には、当時岸和田城主だった小出吉英が沢庵のために大徳寺中に一寺を建立しようとしたが、これも辞退して塔頭の聚光院再興を勧めた（これは吉英が応じなかった）。

一六一六年（元和二）、小出吉英が出石城主に封じられたのを期に、沢庵は荒廃していた宗鏡寺の再興を勧めた。寺が再興落成し、吉英が沢庵の住持を請うたが応ぜず、鼎（てい）山和尚を推挙して泉州に帰った。次いで翌年には、黒田長政が博多の崇福寺に沢庵を招いたがこれも辞退した。当時一流の権勢者の招請のほとんどを拒絶した沢庵は、一六二〇年（元和六）に自ら求めて故郷の出石に帰った。出石では再興した宗鏡寺の後山、入佐山下の草庵「投渕軒」で、一衣（え）一鉢（はつ）の生活を始めている。投渕は汨羅（べきら）の渕に流罪の身を投じた詩人屈原の故事によるものといわれる。

投渕軒は明治の初めごろまで現存し、当時の故人の記憶によると「入口は三畳で瓦を敷き、居室は一間で南北に障子があり、障子の外に濡れ縁があった。室中には一つの炉があるだけで、南の縁に面して心字の池がこじんまりとあった」という。沢庵が、あるとき郷人に与えた書簡にも、

尚々我等も病中の事にて罷在候とて、庵の内も処無く物の本共取散候て居申候故、甚太へも対面不申候事、

写真277　投渕記念館（宗鏡寺）

とあり、小庵の様子がうかがえる。投渕軒での生活は、沢庵自らが野菜を採り、米粟を自炊する生活で、ここで書かれた『入佐遺稿』に、

我終にさびしき事を不知、問くる人の帰れば、あら閑や面白やと思ひ、日暮ぬれば、今ははや問人もあらし我身になりたりあら閑やと思、雨も月も閑なれば、我雨我月と思はるるなり、然りとて此の閑を楽てかく閑居するにはあらす、少し心によるところありてかく閑居せり、若し閑を楽て山居を好まは、世人の富貴を好に同し、蓼の辛を食ふ虫あり、甘草の甘を好く虫あり、辛と甘とは其身にあり、楽むところ同し、然れば、道を捨て楽を取は逸楽の人に同しかるべし、富貴を好て人にへつらい、仏法を売て渡世の営をし、仏祖の道を泥土に墜さんよりはと思いて、樹下石上の栖居せん人は楽をもとめて入山にはあらし、

とあり、

断簡残編一老衣、我斯床内不包非、門無賓客坐無友、有鳥来飛又去飛、

の断章にみられる日常であった。

一六二〇～二七年（元和六～寛永四）までの八年におよぶ投渕軒の閑居中に、「庵百首和歌」や「理気差別論」などの著作があり、一六二二年（元和八）には都から歌人で知られる烏丸光広が山居を訪れ、和歌や漢詩数篇を唱和し、一六二四年（寛永元）には同じく高松宮好仁親王が参禅のため来訪されている（このときは軒を固く閉じて謁せず、宮はむなしく帰洛された）。このように故郷の投渕軒での閑居は、沢庵の最も得意の生活であ

ったことが、間もなくおこる大徳・妙心寺法度事件や、その後の転変の生涯を通じて、七三歳で江戸品川東海寺に示寂する前年まで、折あるごとに投渕に帰軒したことからもうかがい知られる。

大徳・妙心寺法度と沢庵の配流

投渕軒の山居を望んでいた沢庵を時流の波乱に巻き込んだのは、一六二七年（寛永四）七月の大徳・妙心両寺に対する元和法度の強要であり、これから発展して後水尾天皇の退位におよんだ世にいう「紫衣事件」であった。その根本には、江戸幕府創始以来の対朝廷政策があり、その権力弱化と抑圧をねらったものであった。大徳・妙心以下京都の九か寺で紫衣を勅許される者は、まず幕府に申請して検討ののち勅許されることを定めた「勅許紫衣法度」（一六一三年・慶長一八）があり、一六一五年（元和元）に制定された大徳・妙心両寺法度にも「両寺の住持となる者は参禅修業三〇年、一七〇〇回の公案を修行するなどのうえ幕府に言上して入院（僧侶が住持として寺に入ること）開堂を許可する」としていた。一六二七年（寛永四）にいたって、近年ことに大徳・妙心両寺への入院出世（住持すること）が乱れているとして幕府が法度の励行を命じ、元和法度以降に授けられた勅許の紫衣は無効であることを宣告した。

これに対して大徳・妙心の衆僧は、それぞれ硬軟両派に分かれて紛糾した。大徳寺では、古来塔頭に南・北両派があり、南派は軟説を、北派は硬説をとった。翌年軒を出て上洛した沢庵は、玉室宗珀・江月宗玩らとともに北派の中心となり、諸老を代表して沢庵が筆をとり、三名の連署で三〇〇〇字を超す長文の抗弁書を幕府に呈出した。この中でとくに三〇年の修行、一七〇〇回の公案云々は大概を示した空文で、これにこだわるのは真の修行をゆがめ、法度制度の趣旨にも反すると強く抗弁して幕府の反省を求めている。このため、翌々年二月に沢庵らは江戸に召し出された。詮議のうえ、同年七月二五日には判決が下り、元和以来幕

写真278　春雨庵　山形県上山市（中沢章氏提供）

府の許可を得なかった者の紫衣は剝奪（はくだつ）され、玉室は陸奥の棚倉（福島県東白川郡棚倉町）に、沢庵は出羽の上ノ山（山形県上山市）に流謫（るたく）となり、江戸はこれをまぬがれた。結果として、はじめに幕府が企図した朝権の制約とは別の方向に発展したこの事件で、法のため寺のため、一身を省みなかったとして沢庵らの行動は当時の世人に、同情と賞賛を受けた。この事件を機に、幕府の暴挙を不満として、後水尾天皇は明正天皇に譲位された。上ノ山の配流が決まった沢庵は、翌々二七日に、棚倉に配流の玉室とともに江戸をたち、三日間同行して別れ、途中の白川・安積山・信夫（しのぶ）・あこやなどの風光を詠みながら上ノ山の配所に着いている（辻善之助編『沢庵和尚書簡集』）。沢庵を預かった土岐山城守頼行は、和尚が迷惑するほどの厚遇ぶりであったし、岸和田の松平周防守などの諸大名や、判決時の上使加々爪民部・堀式部などの幕府役人までをふくめて、見舞いの品物が届けられた。それらを必要としない沢庵は、「皆々必要な人々に分け与え、自分は何もなく、夏はかたびら一つで送っている。銀子ももらうが、不要で返したり座頭などにやっているので、何かやろうなどとはゆめゆめ思われぬように」と一六三〇年（寛永七）の小出大和守（出石城主）あてとみられる書簡にもある。また「三界を家とするのは出家の身上で、どこにいても同じことである。法のため先師のため自分の心から行って得た罪だから何の苦しみもない」と述懐した書簡や、兄の秋庭半兵衛にあてた手紙には「流罪をきめた上様も、

法度の手前と幕府の威信のためで、われら出家も、出家の法度を反故にしたくないので覚悟のうえである。武士は身を刀に貫いて義理をたてるが、出家はさようなことはしない。今のこの身のありさまが仏法への義理だてである」と心境を書き送っている（『沢庵和尚書簡集』）。当時、青年僧だった一糸文守がこの配所を訪れ、半年間随侍帰依しているし、訪れる人も多く、この配所を「春雨庵」と名付けて、沢庵は自適の生活をおくり、和歌一千首を詠むなどして幽居を楽しんでいる。

沢庵の赦免と家光の厚遇

一六三二年（寛永九）将軍秀忠の死去による大赦で、沢庵は玉室とともに流罪を免ぜられ、江戸に召還された。ひとまず神田の松平伊豆守邸の一隅にあった草庵広徳寺に落ち着いた。広徳寺は、沢庵と同じく出石に生まれた明叟宗普を開山とする寺である。明叟は諡号を真如広照禅師といい、姓は福富、一五七一年（元亀二）五六歳で大徳寺一一三世に出世し、のち相模国早雲寺に住して五世となり、北条氏の帰依が厚かった。その後、同国の栖徳寺・湯本の大聖寺を創めた。秀吉の小田原征伐に会い、小田原城中に籠ったが、勝運なきを憂い、絶食して、一五九〇年（天正一八）四月一五日、七五歳で城中に没した。その後、弟子の希叟和尚が江戸下谷に円満山広徳寺を創め、明叟をその開山とした。同郷の深い縁を感じさせる（広徳寺はその後、沢庵と柳生宗矩との関係もあって、柳生家の菩提所となる）。

写真279　東海寺山門
（東京都 東海寺提供）

問もなく、赦免に努力した駒籠の堀直寄の別業に寄居

していたが、一六三四年（寛永一一）六月には幕府の許しが出て、玉室とともに大徳寺に帰った。同年に天海・柳生宗矩・堀直寄らの強い要請もあり、やむなく七月に上洛して来た将軍家光に謁見し、その後に両者の関係が深まることになった。ことに沢庵の推挙は以前より親交のあった柳生但馬守宗矩によるものといわれる。次いで同年八月には、後水尾上皇が沢庵を仙洞御所に召されて法話を聞かれた。沢庵はその後但馬に帰って待望の投渕軒に入った。紫衣事件で軒を出てから六年目の帰軒であった。

しかし、沢庵が望んだ山居生活は翌年一二月で打ち切られる。それは幕府の召し出しによるもので、やむなく江戸に下った沢庵は、柳生宗矩の別業に寓居してこれを「検束庵」と名付けている。翌々年七月には、将軍が沢庵と玉室・江月を召して宗旨を問い、玉室と江月は京都に帰されたが沢庵は引きとめられて、能見物や茶に招かれるなど登城して家光の歓待を受けた。やがて一〇月には投渕に帰軒したが、さらにその翌年三月には、再度幕府の召し出しがあって江戸に下った。

家光の沢庵への厚遇は次第に増し、老中さえ召されない二の丸の能見物から、夜には奥へ入って将軍と二尺ほどの距離に対座して二とき（四時間）ばかり話したり、松平信綱に案内を命じて虚堂の墨跡や名物茶具を見せたり、家光自らの点前（てまえ）で茶を喫するなど、御三家にも見られない破格の扱いであった（『沢庵和尚書簡集』）。

このようなもてなしを迷惑とする沢庵ではあったが、片時も離さない家光の信依は、沢庵が望む但馬の山居を許さなかった。それのみではなく「柳生の長屋（検束庵）にいては不自由でもあり、二の丸に召すのも体面上さわりもあるから、寺を建て大徳寺の末寺とすれば、後世まで残って本寺のためにもなる。品川なら家光の別荘にも近く、風光も閑寂な地であるから自ら選んで、寺を創建し、沢庵を住まわせたい」（『沢庵和尚書

写真280　沢庵筆慈眼寺山号（慈眼寺蔵）

簡集』）といわれ、これが実現したのが品川の東海寺であった。一六三九年（寛永一六）沢庵六七歳のことであり、その開山住持を余儀なくされた。

家光のこの厚遇は、沢庵には迷惑であり「あと二、三年の余命を人里離れた山中（投渕軒が想定される）で過ごしたい念願であるが、いたしかたがない、つながれた猿同然である」とも述懐し、小出吉英に贈った書簡の冒頭にも

山のおく谷のそこにてしなましと
おもひし身さへうき世成けり

と書き出している。恐らく沢庵を将軍のもとにつなぎ止めたのは、その後も解決をみていない大徳・妙心両寺の法度問題であり、事件以降の両寺への出世は停止されていた。これが沢庵の努力で一六四一年三月二八日に至って両寺への入院出世が以前のごとく許された（江戸幕府への言上に及ばず、所司代のみで綸旨を受けられる）。沢庵はこれを愚老一世の満足であると喜んでいる。先の法難を身を挺して解決に進めた沢庵をさして、大徳寺中興の祖とするゆえんである。

その後も家光の帰依と厚遇はいよいよ深まり、品川に東海寺が建立されてから一六四五年（正保二）に沢庵がここに示寂する約七年間に、家光が東海寺に来駕した数だけでも七五回におよび、沢庵が江戸城に召された数は、恐らくこれに幾倍するものと推測される。この家光と沢庵の関係は、かつて家康の下で黒衣の宰相といわれた金地院崇伝のごとく、幕府の宗教政策指導者としてではなく、名聞や利害を全く離れた心のよりどころとしての関係で、孤独な将軍家光に最も必要な沢庵であったと考えられる。

逸話として巷間に知られる沢庵漬の起こりは、『広辞苑』にも「沢庵和尚が初めて作ったとも、また貯え漬の転ともいう」とある。ある時、家光が東海寺に来駕して沢庵を訪れた。話がはずむ間に食事時になり、寺ではそのもてなしに貯え漬を出した。美食に慣れた家光には未知の珍味であり、これは何かと沢庵に聞くと、貯え漬だと答えた。家光が、これは和尚の味で、「沢庵漬」だといった、ということから、以後、沢庵漬と称したという。

沢庵は国師号をも辞退した、親しみ深い在野の和尚である。そして

飯は何のためにくふものか、ひだるさやめんための計略である。添物がなくて飯が喰えぬというのはまだ飢がきていないからだ。飢が来なければ一生くわなくてもよい、服薬のごとくせよ、衣類もまた同じである。人は衣・食・住の三つで一生苦しむが、自分はその心がないからこの三つのくるしみがうすい

（「結縄集」）。

と、一衣一鉢の思想を貫く沢庵にこの話は符合する。権勢者である将軍に暗に質素倹約を教え、その後の幕府の主要な政策としてうち出される経過からも、また沢庵その人とその漬物の庶民的で枯淡な味わいからも、意義深い逸話として面目躍如たるものがうかがえる。

投渕山居の夢　前述したように、たびあるごとに入佐山下の投渕軒に帰った沢庵も、東海寺住持後は、家光が片時も離さなかったし、老齢も手伝ってか、ほとんど他出をしなくなるが、それでも住持する前年の一六三八年（寛永一五）には、但馬の温泉に浴することを請うて江戸を発っている。途中で後水尾上皇に召されて仙洞御所に参内し、上皇・国母をはじめ公家・諸門跡・五山衆の列座する席で「原人論」を

講じた。これが叡慮にかなって同年一〇月には僧位の最高である「国師号」宣下の優詔を受けたが、名徳に至らぬ野衲（僧の自称）の身としてこれを拝辞し、代わりに大徳寺二世徹翁義亨に追贈を請い嘉納されている。このように名利を好まぬ沢庵であり、投渕への帰軒を兼ねたであろうこの年の但馬の温泉行きは、果たされずに終わった。

これが実現したのは一六四四年（正保元）で、三月に同じく但馬の温泉に浴することを名目に請うて江戸を発ち、京都に入ったが、再度上皇に召されて「正法は続き難いが、和尚が法嗣の児孫を断つのは残念である。適当な者を選んでは」との仰せを受けたが、沢庵は拝辞して退出した。上皇の意中には一糸文守があったといわれる（『紀年録』）。京都から堺に立ち寄り、六月二三日には小出吉英の心づかいで修理清掃の行き届いた投渕の庵室に到着している。待望した七年ぶりの帰軒であり、天祐紹杲が随行して庵での起居をともにした。

写真281　宗鏡寺本堂

しかしすでに「途中で江戸から御内書が届いて、九月時分には早々に下向するようとのことで長くは居られない。昨夜庵室に入ったが、諸木深々と繁り、物静かさ、七年以来の閑、今日一日で江戸道中、京・堺の苦労も忘れ去った。庵室の前はさても〳〵古びて、今は知らぬ里に来たようであるが、心をしずめれば、むかしの人に会ったようである」と、翌二四日付けで小出吉英にあてた書簡（辻善之助編『沢庵和

写真 282　沢庵和尚墓碑（宗鏡寺）

尚書簡集』）があり、次に

山をいでてうき世をめぐり又山に
入佐の月や身の類なる

の詠がある。また、同じ書簡中に「我身一つ我ままにならず、山に入さの月も、又東の山のはにあすのゆうべをなげくばかりの心底である」と江戸帰参を述懐している。最後の帰軒であることを予知した沢庵は、所在の書巻やわずかの什器をすべて処理し、軒を宗鏡寺住職鼎山和尚に託して、その冬の一〇月には出石をたって東海寺に帰った。これまでは軒を出るたびに、畳をあげ戸に釘を打って入口に鎖を施し、次の帰軒に備えるのが常であったといわれる。

東海寺に帰りついた沢庵は、翌一六四五年（正保二）一一月二九日に発病して、一二月一一日に東海寺に示寂した。世寿七三歳であった。辞世の偈に「夢」の一字を書き、遺誡がある。「全身を後の山にうめて、ただ土を掩って去れ。経を読むことなかれ。斎を設くることなかれ、道俗の弔賻（物を贈って弔うこと）を受くることなかれ。衆僧著衣喫飯平日のごとくせよ。塔を建て像を安置することなかれ。牌を立つことなかれ。諡号（死後におくる名）を求むることなかれ。木牌を本寺の祖堂に納むることなかれ。年譜行状を作ることなかれ」（『東海和尚紀年録』）と。

沢庵和尚には、多くの著作や手紙があり、「明暗雙雙集」・「萬松語録」・「碧巌九十偈」・「安心法門」・

「上中下三字説」・「理気差別論」・「南宗寺法度」・「中興法度」などの仏法に関するもの、「詠歌大概音義」・「東海百首」・「庵百首」・「謫居千首」・「夢百首」など多くの和歌や「東関紀行」・「鎌倉遊覧記」・「木曽路紀行」・「東海道之記」の紀行文、「東海夜話」・「玲瓏集」・「結縄集」などの法話集のほか、柳生宗矩に剣道の心を説いた「不動智神妙録」や、「太阿記」があり、「医説」・「骨薫録」・「旅枕」などの養生法や対症法を説いた著書もある。また大名・友人・知人にあてた書簡はことに多く、ほかに「東海和尚紀年録」・「萬松祖録」のように弟子などによって編集されたものもあり、そのほとんどが『沢庵和尚全集』に収録されている。

本末関係と寺檀制度　江戸幕府は、幕藩体制が確立するのに併行して一六〇一年（慶長六）から一六一六年（元和二）にかけて、全国有力寺院や宗派を対象に相ついで新しい寺院法度を制定し、近世的な教団組織を確立するための宗教政策を展開した。その中心をなしたのは、本末体制で、師弟関係の法脈を軸とし、本山による末寺住職の任命権を公認し、一六三二年（寛永九）には諸宗本山に対して「末寺帳」の書きあげを命じた。

またキリシタンの禁止を契機に、宗門改めに寺請（てらうけ）制を採用したことから進めて寺檀制度（檀家制）を確立した。この本末体系は、出石においても、一六二五年（寛永二）一〇月に沢庵和尚が宗鏡寺塔頭諸寺に示した「中興和尚法度」にも見られる。すなわち宗鏡寺は京都大徳寺を本山とする臨済宗の禅寺であるが、宗鏡寺を本寺とする願成・正受（後の正眼）・極楽・勝福寺の塔頭や城崎極楽寺などの末寺があり、その本末の関係や心得を記したものである。下って一七五九年（宝暦九）ごろの「書上帳」には、郡内の宗鏡寺末に、慈眼寺

写真283　旧福成寺山内図（福成寺蔵）

（桐野区）・龍谷寺（三木区）・安国寺（但東町相田）・慈等寺（豊岡市三宅）がみえ、「宗鏡再輝」には蔵雲寺（但東町中山）と雲沢寺（豊岡市奥野）があり、大徳寺派の中本山宗鏡寺には、塔頭四か寺のほか、末寺として城崎の極楽寺を加えた七か寺があった。

京都の浄土真宗興正寺を本寺とする福成寺（現在・西本願寺末）に例をとれば、一六九四年（元禄七）の「配下末寺創立年時記」に西宗寺・勝林寺・長専寺・善教寺・浄徳寺・高福寺の六か寺を境内末寺と記録して、福成寺と寺中諸寺の本末体系を明示している。そのほか、郡内末寺には西方寺（宵田区）・善立寺（鳥居区）・光蓮寺（但東町久畑）などが知られる（宝暦九年ごろの「書上帳」）。このように福成寺は、江戸時代には豊岡の光妙寺（現光行寺）とともに但馬における二大勢力として、中本寺の地位にあったが、前記の寺中寺院や道場とも本末関係を結んでおり、廃藩間もない一八七三年（明治六）に兵庫県庁に提出した「寺籍明細調書」には、中本寺福成寺の末寺として、気多郡に真光寺・西光寺、出石郡には勝林寺・西宗寺・善教寺・高福寺・長専寺・浄徳寺・西方寺・善立寺・光蓮寺・東光寺、城崎郡清蓮寺が記載されている。

このような本末関係や寺檀制度に支えられた信仰や行事の盛大さを知る例に、一七八〇年（安永九）三月一九日京都西本願寺門主が湯島（城崎町）に入湯のため出石に泊まったときが挙げられる。このとき本陣は下吹

田屋で、お供の人数およそ四百人、お先荷一一駄、長持などは一九日昼豊岡の光行寺に送り届け、人足宰領およそ六〇〇人を下郷と気多郡で引き請けている。また、一七九五年（寛政七）四月九日より信州善光寺如来の巡国開帳が魚屋の浄土宗唱念寺で五日間行われて、そこから豊岡の来迎寺に回った。この時の人足も宰領以下およそ六五〇～六六〇人（『中山記録』）とあり、これら諸行事の盛大ぶりがうかがい知られる。

遊行上人の巡行

寺院の本末制度や寺檀制度の進展とは別に、但馬にも注目される庶民を対象にした布教活動が、浄土系の時宗にみられる。時宗は一三世紀の後半に一遍上人によって開かれたもので、「平生を臨命終時と心得、油断なく称名念仏する」ことから名付けられたといわれ、他宗と異なって一生不住を原則としたから、寺をもたず遊行（ゆぎょう）して布教したので、遊行上人（衆）と呼ばれた。布教には「南無阿弥陀決定往生六十万人」と印刷した小紙片を人々に配って念仏を勧め、また鉦をたたいて踊り、称名する踊り念仏を修したが、庶民の間に迎えられ、ことに江戸時代に入って一般化して隆盛をみた。一遍没後に教団組織も整い、不住の精神は引き継いだが所属道場や末寺組織も整い、毎年上人が遊行衆をひきいて全国を巡回布教した。

但馬地方に遊行上人が巡回したのは、一六九九年（元禄一二）・一七一四年（正徳四）・一七三一年（享保一六）・一七四五年（延享二）・一七五九年（宝暦九）・一七七三年（安永二）・一七九四年（寛政六）・一七九七年（寛政九）・一八一五年（文化一二）・一八二五年（文政八）・一八五四年（安政元）の一一回が確認される。その巡路は、丹後から出石―豊岡―竹野浜と巡り、海路を浜坂または因幡へ回るのがふつうだったようである。

一七三一年（享保一六）の場合を例にみると、四月九日に出石に入った一行は、二一日まで滞在して舟で豊岡に下ったが、この時の模様は熊野権現を奉祀した御殿舟を先頭に、上人や伴僧を乗せた屋形舟六艘につづ

いて、供舟や荷舟など八艘の計一五艘を連ねた盛大なものだった。これらの舟には出石郡下郷と気多郡の大庄屋・庄屋ら三〇人からなる宰領と夫役の人足二〇〇人が分乗し、豊岡から竹野浜までの送行は豊岡側が引き継いでいる（宿南保『但馬史』4ほか）。また一七九四年（寛政六）の場合は、丹後宮津より五月二八日出石に到着し、六月六日に豊岡光行寺へ巡回しており、送付人足およそ七五五人の盛大なものであった（『中山記録』）。一八一五年（文化一二）の巡回は、五月一九日出石に到着、二五日に豊岡に出立し、五月二七日豊岡の西行寺で五五世一空上人が発病し、二九日に同寺で没する事故があった（『御用部屋日記』）。

巡回は上人の到着前に寺社奉行の達しで、日程行事や担当藩士の役割が決まり、受け入れ準備を整え、大庄屋にも知らされて人足などが動員された。出石での上人の宿坊は唱念寺（浄土宗）が充てられ、一八二五年（文政八）四月二七日の巡回記録では、上人の本坊が唱念寺、宿坊が隣りの本高寺（日蓮宗）と如来寺（浄土宗）であったほか、近くの吹田屋・門垣屋（かずかや）・鍋屋・釜屋などの富商宅が宿を申し付けられている（『御用部屋日記』）。

写真284　本高寺

出石の寺社と著名僧

「諸社寺書上帳」（宝暦九年ごろ）と桜井石門編の『但州叢書』中の『出石封内明細帳』（嘉永三年ごろ）をもとに、出石の城下町に所在した寺院を宗旨別に列記すれば、真言宗には神谷山西林寺（高野山正智院末）・鉄壁山智明院（同）・医王山光明院（同）があり、浄土宗には済船山唱念寺（京都智

恩院末）・貞松山高徳寺（同）・見性山称名寺（同）・光明山如来寺（同）・瑞雲山心光院（同）が、浄土真宗では祇山福成寺（京都興正寺末）と同寺中に勝林寺・西宗寺・高福寺・善教寺・長専寺・浄徳寺があり、ほかに真覚寺（豊岡光行寺末）・西方寺（福成寺末）・本覚寺（京都本願寺末）があった。

禅宗のうち、臨済宗では円覚山宗鏡寺（京都大徳寺末）とその塔頭に願成寺・正眼寺（旧正受院）・極楽寺・勝福寺があり、曹洞宗には梵唱山吉祥寺（相模法泉寺末）・直指林見性寺（丹波円通寺末）と誓願寺（旧清願寺）が、法華宗には一乗山経王寺（京都妙顕寺末、寺中に感応坊あり）と、舟橋山本光寺（京都立本寺末、明和七年本高寺と改称、寺中に尊重院）があった。山伏寺には、真言宗醍醐寺三宝院派の大善院（和泉内山直同行）・金剛院（世儀寺玄養院同行）・金蔵院（和泉桜本直同行）・持宝院（和泉桜本金蔵院同行）の合計寺院二八、山伏寺四があり、そのほか町内に文珠院・持徳院など一一の子院もあった。

写真285　西方寺

神社では、城内の御城稲荷社と諸杉社や、谷山の磯部社（現石部）のほか、弁才天社・荒神社・秋葉社・呉服社・稲荷社など民間信仰の小規模社をふくめれば記載合計三二社におよび、そのうち寺院の管理によるものが最も多く、御城稲荷は光明院、諸杉社は大善院、磯部社は西林寺持ちであった。また一部には京都吉田家支配の巫子朝日伊勢や和泉持ちもみられ、惣百姓持ちやなかには個人管理のものもあった（宝暦九年ごろの「書上帳」）。この傾向は城下以外の村落でも同じであるが、

写真286　龍　谷　寺

宮内の一宮出石大明神社（現出石神社）には社人長尾日向が専任したほか、桐野の賀茂大明神社（現御出石神社）には森岡丹太夫が、荒木の八幡宮社（現須義神社）には川崎六郎左衛門が社人として管理に当たった。現在の出石町内の神社で社家が管理したのは前記の三社だけで、中村の伊福部大明神社は、上村・中村・下村（現福住区）・鍛冶屋村・長砂村・博労町（現松枝区）・小御料庄町（現松枝区）・七軒町（現弘原区）の八町村の氏神で、祭祀はこれらの氏子持ちで、中村の不動院（真言宗）が別当であった。

なお、村々にはそれぞれ一社から二、三社があって、ほとんどの村々には地神を祭る荒神社があるほか、八幡社・愛宕社・若宮社・弁才天社など多様な小祠が見られる。村方の寺院には、旧山之中分桐野に大悲山慈眼寺（宗鏡寺末臨済宗）があり、弘原分の鍛冶屋に清水山法城寺（法華宗、京都本隆寺末）と中村に悉念山不動院（真言宗、高野山正智院末）があり、下郷分では宮内に応峯山惣持寺東光院（真言宗、高野山正智院末）と同寺末で山伏司を兼ねた般若院があり、袴狭に医王山宝積寺明王院（真言宗、高野山正智院末）、口小野に龍野山実相寺自性院（真言宗、高野山正智院末）、田多地に福田山善光寺（浄土宗、京都智恩院末）、福居に箱根山西光寺（浄土宗、昌念寺末）、伊豆に山伏寺金剛院（世儀寺玄養院同行）、尾崎（現鳥居区）に善立寺（浄土真宗、福成寺末）、三木に興雲山龍谷寺（臨済宗、宗鏡寺末）の諸寺があり、現在豊岡市に併合された旧神美分を含めた旧封内の下

郷分だけでも寺数一一、社数七二を数えた（宝暦九年ごろの「書上帳」）。

近世における出石関係の著名僧は、沢庵再興後本山大徳寺の輪番寺の位置にあった宗鏡寺の立場から、大徳寺へ入院出世した宗鏡寺の世代が特筆される。中興後、沢庵の推挙で第一世となったのは鼎山一猷で、二世の旋峰宗右は法を伝外和尚に継ぎ、一六七九年（延宝七）二月四日に大徳寺に奉勅入寺して二二三世となり、一六九〇年（元禄三）より宗鏡寺と清泉寺（京都）に隔年番住することになったが、翌年三月七日六二歳で清泉寺に没した。宗鏡寺三世の江峰宗岷は法を旋峰に継ぎ、宗鏡寺と清泉寺を兼務し、一七〇二年（元禄一五）に大徳寺に出世し二六三世となり、一七〇七年（宝永四）一一月五五歳で宗鏡寺に没した。五世の天柱義雪は法を大雲義休に継ぎ、品川東海寺中の妙解院に住し、大徳寺に出世して二八五世となり、一七二七年（享保一二）四月一三日宗鏡寺に入り、間もなく同年五月一五日六〇歳で没した。六世の見道宗善は法を天柱義雪に継ぎ、一七四二年（寛保二）大徳寺に出世し三四六世となり、宗鏡寺に住し、一七四六年（延享三）一一月一二日五四歳で没した。同じく七世の一道宗等は法を見道に継ぎ、一七六六年（明和三）に大徳寺に出世して三七七世となり、宗鏡寺に住して、一七九九年（寛政一一）正月二八日八五歳で没した。同八世の金嶺義剛は法を一道に継ぎ、一八〇九年（文化六）大徳寺に出世して四二四世となり、宗鏡寺に住して、一八二二年（文政五）一二月一二日六七歳で没した。九世の正順宗貞も法を金嶺に継ぎ、一八三一年（天保二）大徳寺に

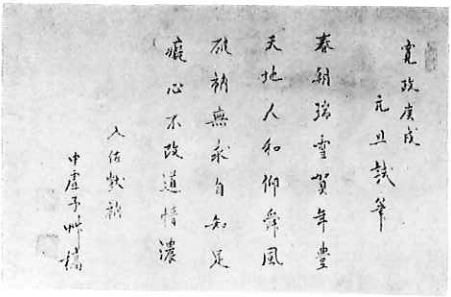

写真287　一道宗等墨跡（岡本久彦氏蔵）

出世して四四五世となり、同寺に住し、一八四五年（弘化二）一二月一一日に没した。

以上の宗鏡寺世代以外で大徳寺出世を果たした人に笑雲宗闇と真峯宗正がある。笑雲は出石郡矢根に生まれて宗鏡寺塔頭正眼寺に住し、一八一七年（文化一四）に大徳寺に出世して四三二世となり、京都清泉寺九世となった。真峯は出石郡赤花に生まれ、相田の安国寺から宗鏡寺に入り、一道宗等の弟子となり、一八一八年（文化一五）大徳寺に出世して四三四世となり、品川東海寺などに輪住した。また一八六五年（慶応元）から宗鏡寺にも住し、一八八四年（明治一七）大徳寺初代管長に就任した牧宗宗寿については後述する。

その他、大徳寺出世僧以外では、一五九〇年（天正一八）九月一二日の開祖碑のある日蓮宗経王寺の日道律師、小出播磨守秀政の四男で摂州の陽向山玉泉寺を継いでいたが、小出吉政の出石移封後の一六〇五年（慶長一〇）、玉泉寺を出石に移して梵唱山吉祥寺を創めた祐山嫩佐（どんさ）が知られる。ことに祐山はその後吉祥寺末寺八か寺のうち六か寺の開祖となり、また出石小出氏二代の吉英のとき、有子山頂の高城を山麓に移して城下町を経営することを献策したともいわれ、一六四九年（慶安二）三月五日に没している。

そのほか、本高寺中興の祖といわれる日成は、字を文琢、常性院と号し、後水尾天皇の帰依が厚かった高僧壺（つぼ）日審について学び、その器許を得て故山諸寺の復興につとめ、小出吉英らの庇（ひさし）護のもとに諸堂を整備するとともに布教につとめ、一六九五年（元禄八）四月三日に没した（『本高寺過去帳』）。このほかにも、諸寺の開祖や、それぞれの布教、経営などにも業績をあげた僧が散見される。

2　教　育

藩校弘道館の創立

弘道館は、藩主仙石氏三代の政辰が一七七五年（安永四）に創立した藩校で、同年八月の布告には

御代々の思召に付、今般学問所御建立可被遊、追て御再建可有之に付、先ず当分東御門外御家中屋敷並右に続く伊木屋敷御取繕被仰付御家中一同、文武可相励旨、被仰出候事、（『兵庫県教育史』）。

とあり、安永四年に仮校舎が設けられ「学問所」と呼んだのに始まる。その後、同地に一七八二年（天明二）二月の仙石氏四代久行のとき、敷地面積六〇一坪・建坪二四一坪二合五勺の新校舎が完成して、「弘道館」と号し、自ら扁額を書いて館中に掲げ、同年三月には古学派の祖伊藤仁斎の末子蘭嵎の子、伊藤東所を京都より招いて開講式をあげた。

弘道館を称する藩校は全国に六校あり、徳川斉昭の開いた常陸水戸の弘道館（一八三八年・天保九開校）がよく知られるほか、肥前佐賀の鍋島治茂（一七八一年・天明元）、備後福山の阿部正倫（一七八六年・天明六）、下野茂木の細川興徳（一七九四年・寛政六）、近江彦根の井伊直中（一八三〇年・天保元）がそれぞれ藩校を弘道館と名付けているが、出石の弘道館が最も古く、寛政の改革以後に勃興する諸藩の藩校より先行して開校している。

弘道館の名称は、寛政四年三月の「弘道館への諭達」にも見られるように、「人能く道を弘む、道人を弘むにあらず」という『論語』の有名な一節から名付けられている。その教育目的は

風俗淳素に、人心誠実にして、賢哲の教訓を守り、天命を畏れ、神祇を敬ひ、父母に孝順にして、忠誠を尊び、自ら

写真288　弘道館扁額・仙石久行書（弘道小学校蔵）

聖賢の教に符合し、修身斉家治国の事に於て聊凝滞せず―中略―勤学格別に勉励致し、父は教へざるの過なく、師は訓導厳ならざるの懈りなく、子は学問なることなきの罪なく、共に弘道学名の御主意に叶ふべき所の修行肝要に云々

とみえ、仁道・人道・天道を説き、儒教的なものが中心であった。また、学問所創立時の儒官桜井良翰（舟山）が伊藤蘭嶼に、その嗣子桜井篤忠（東亭）も伊藤東所に学び、弘道館の開講式に東所を招いていることからも、その学風の中心は伊藤仁斎の古学派であったことが知られる。

その後、時流の変遷に応じて、儒学のほか国学・洋学などの諸学も加わったことが、使用した教科書からも知られる。主なものは、四書・五経・『孝経』・『左氏伝』をはじめ、『史記』・『漢書』・『三国志』・『十八史略』など多数の漢籍と、『日本書紀』以下『古事記伝』・『万葉集』・『土佐日記』・『神皇正統記』・『太平記』・『徒然草』・『日本外史』などの和書も多く、一部には『万国公法』・『和蘭政典』などの洋学関係書や、『但馬国太田文』・『但馬考』・『但馬風土記』（近世の編纂でいわゆる古風土記ではない）などの郷土史も取りあげられている（『兵庫県教育史』）。

弘道館の授業と運営　弘道館への入学は、藩士の子弟に限られ、足軽以下平民の入学は禁じられていた。ためにその運営費用はすべて藩費を充て、学費の一切は不要であった。就学年齢は一〇歳で、二五歳

になると退学したが、一八六九年（明治二）に開設された武校（文校と武校に分かれた）では一五歳から三六歳まで武道を修練している。生徒には通学生と寄宿生の別があり、明治維新前には生徒数は約二〇〇名を数え、そのうち寄宿生は約三〇名程度だったといわれる。寄宿舎は一八一〇年（文化七）に本校の付属建物として設けられ、幽蘭舎と名付けて一時全生徒を収容したが、一八二六年（文政九）には廃止された。

授業は例年四月八日が読書始めで、藩主が臨校して開講した。平日の授業は朝五ツ時（午前八時）から九ツ時（一二時）までで、開校時には一定の課程はなく一〇歳で念書寮に入って四書・五経の素読を一二、三歳まで学び、蒙養寮・小学寮・学寮へと順次その業を進めたが、その後時々に変遷し、一八六九年（明治二）の文校学規では、生徒を一等生から五等生までの五段階に分けている。教科内容は、漢学が主で、ほかに和学と筆道を課し、習礼・兵学・槍剣・柔術などは藩校で教えるとともに教官の私宅でも教え、洋学・医学・算法・砲術・遊泳などはすべて教官の私宅で教授した。

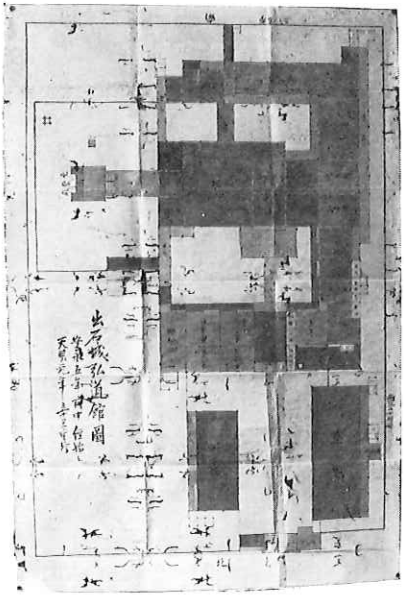

写真289　弘道館図（出石神社蔵）

藩校の職員組織は、年寄格で役料三五〇石の奉行を長に、これを補佐する役料二五〇石の用人があり、以下総締役・締役・講師・助教・会長・寮長・主事・念書改・小学長・蒙養長・学生頭取・念書長・手習所世話役などの階等があ

り、明治維新時の職員総数は約五〇人であった。講師には、藩の儒官だった桜井舟山・東亭・東門・石門の桜井歴代のほか、井上静軒・堀田省軒らが著名で、ほかに特別に招請した賓師もあり、開講式に招かれた伊藤東所や伊勢の儒者猪飼彦博（豊岡藩稽古堂建学時の賓師で朱子学者）のほか、但馬青谿書院の池田草庵らも招かれている（『兵庫県教育史』）。

このように、弘道館は出石藩士の子弟教育を担当し、多田弥太郎や加藤弘之らをはじめとする多くの英才を育てたが、明治政府による学制発布の翌年、一八七三年（明治六）に廃校し、その建物は一八七六年（明治九）の出石町大火で焼失した。その後は旧三之丸御対面所（藩主居宅）跡に移って、出石小学（弘道学校）が開設され、現在の弘道小学校にその名をとどめている。

私塾

江戸時代に開かれた但馬の私塾九塾（『兵庫県教育史』但馬の私塾表）のうち、五塾が出石に開設されている。設立年代は不明ではあるが、最も古いのが「幽蘭舎」で、出石城下伊木町の弘道館近くにあり、藩校の講師でもあった藩儒の桜井東門（一七七六～一八五六年）時代に開かれたとみられる（同名の幽蘭舎が弘道館の生徒寄宿舎として一八一〇年に設けられ、一八二六年に廃止されているので、これが私塾に移行したとも推測される）が、その活動が明確なのは次の桜井石門の時代である。

石門は、一七九九年（寛政一一）五月一六日に東門の長子に生まれ、名は英、字は伯蘭、通称一太郎、石門と号した。赤穂の藩儒赤松滄州に師事し、仙石侯の侍講となったが、一八二七年（文政一〇）春江戸の藩侯支族仙石弥三郎の家政整理に功績があり、居住四年ののち天保の初めに出石に帰って弘道館の督学となった。また、一方で仙石騒動後の勘定奉行を兼務したが、関口齢助によって除かれ、職を去って京師に上り、有栖

川宮や二条公に招かれて侍講となった。その後一八四三年（天保一四）に出石藩政務の混乱を処理するために召還されて参政に任じ、仙石騒動による削封の回復に努力し、村替えと藩士の復禄に努めたが、途中京師において病にかかり、一八五〇年（嘉永三）一二月一八日に五二歳で没した。著作には漢学のほか『但州叢書』・『続但馬考』（未完）などがある。私塾幽蘭舎の詳細や、廃塾年次は明らかではないが、生徒数は六一名（『兵庫県教育史』但馬の私塾表）で、門弟中に堀田省軒・島村弘道・林鼎一らの儒者のほか勤王家の高橋甲太郎が知られる。

年代的にそれに次ぐ私塾は、一八三五年（天保六）に小山徳助（士分）が城下馬場町に開いたもので、男子のみ七一人の生徒数が知られるが、塾名、廃業年次その他の詳細は不明である。次いで一八四七年（弘化四）に堀田省軒が谷山町に開設した「黙識斎」があり、一八六二年（文久二）に廃業したが、生徒数は男子七〇名であった（『兵庫県教育史』）。

堀田省軒は名を遊、字は子敏、反爾と称し、のち名を為之と改めた。一八〇八年（文化五）一〇月に出石藩士本間義制の二子に生まれ、同藩士堀田為恭の養子となり堀田家を継いだ。藩儒桜井石門に学んでのち筑前の亀井暘州、大坂の藤沢東畡に従学してその塾長となり、一八四三年（天保一四）に帰藩して翌年弘道館講師兼諫諍役を兼ねた。また、このころ私塾「黙識斎」を開いて子弟教育に従事し、土岐久則（養父、朝来などの郡長）・島村衡平・西山員直（出石郡長）らの英才を育てた。省軒は儒学のほか武技にも通じ、弓・馬・刀・槍のすべてを究めたといい、郡奉行・町奉行などを歴任して、明治維新時には大参事まで進み、廃藩置県の処理に活躍して一八七九年（明治一二）六月二六日に七二歳で没した。著書に『省軒集』がある。

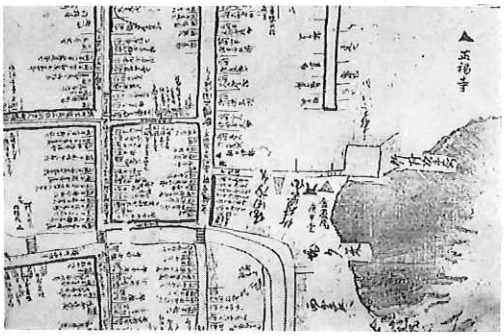

写真290　庚申堂位置図・天保2年城下絵図
（中易文亮氏蔵）

宗鏡寺町には林鼎一が一八五六～七二年（安政三～明治五）まで開設した「孚光堂」があった。塾主の林鼎一は名を欽、通称鼎一、字は承祖、栖碧・楼碧・需亭とも号し、一八二九年（文政一二）九月二八日出石に生まれた。林家は代々出石に住み、庚申堂を称し修験道を修めた。鼎一は、書道や儒学にも通じた林黙然（一八〇一～六三年）の子で、藩儒桜井東門に従学し、その後桜井石門に従って大坂の篠崎小竹の門に入り、また頼山陽の弟子西京の牧百峯について詩文を学び、のち江戸に出て幕府の昌平黌に学んだ。醍醐の三宝院門跡に仕えたが、一八六三年（文久三）出石に帰って、宗鏡寺町（現東条区）の金蔵院西側にあった庚申堂を廃して私塾を開き「孚光堂」と称した。一八七二年（明治五）の学制発布とともに廃塾したが、その後「成藍舎」を開くなどして、一九〇三年（明治三六）九月三〇日に七五歳で没した。その生徒数は七〇人と『兵庫県教育史』但馬の私塾表にみえる。

また、一八五八～六八年（安政五～明治元）まで、伊木町（現材木区）に開設された島村弘堂の「松琴楼」が知られる。弘堂は号で、名は儼、字は千里、通称慊甫、のち衡平と改めた。豊岡藩士下村安右衛門の三子として一八二一年（文政四）正月二日に生まれ、出石藩士島村光恭の三女に配して嗣養子となり、桜井石門・堀田省軒・井上静軒らに学び、次いで儒を藤沢東畝に、小浜清渚に文を、遠藤義斎に経済を学び、また藤田東

湖・安井息軒にも学んで帰藩し、藩校弘道館の講師となり、私塾を開設してその教授にあたった。

その学風は、学派にこだわらず経世有用を旨とし、学科は漢学を主に、四書・五経・『蒙求』・『十八史略』・往来物などを教科書に用いている。生徒数は五〇人で、授業は午前七時から午後五時までで、その塾則が知られる(『兵庫県教育史』)。維新後、元方勘定奉行・出石藩少参事に任じ、主に会計を掌理し、のち再び教学を兼務し、一八七六年(明治九)一月二八日五五歳で没した。その弟子に仙石政固・桜井勉・久保田精一(豊岡市)らがある。

心　学

藩校や漢学を主とした私塾のほかに、これとは別種で、江戸時代後期に社会教化をめざした心学講舎の運動がある。心学は、丹波の農家に生まれた石田梅巌(一六八五～一七四四年)が始めた「人の人たる道」を求める学問で、庶民ことに商人の間に共感を得て各地に広まり、心学講舎が生まれた。教化の方法は、少数のものが集まって、定例的に相互で研究し合う集会討議的な方法を主とした。梅巌没後も門弟手島堵庵(一七一八～八六年)らにより継承され、京都の明倫舎などを中心に心学が普及した。

但馬でもこれに学んで、関宮に「敬忠舎」、八鹿に「立誠舎」、豊岡に「含章社」が知られ、出石にも一七九一年(寛政三)に「日新社」が設立されているが、その詳細は判明しない。ほかに領内の出石郡香住村(現豊岡市)にも田井惣助(林当、田中河内介に幼時句読を教えたことでも知られる)が「養浩舎」を一八〇五年(文化二)に開設している。田井林当は京都の明倫舎主上河棋水や原田道立に学び、一七八九～一八四四年(寛政～天保)にかけて、京都から原田道立やその門下が招かれて、豊岡・出石・八鹿などで道話の会合を開いている(『神美村誌』ほか)。

領内坪井村の庄屋文書『中山記録』によれば、一七九六年(寛政八)一〇月一四日より谷山町(現下谷区)の経王寺で手島流通二先生、寛政一〇年八月一八日に京都より手島流植川先生、同一一年二月六日には魚屋町の如来寺で江戸先生が来石して、ともに手島流心学の道話講釈が開かれたことを記しており、寛政から天保ごろがその最盛期であったことがうかがえる。

寺子屋

寺子屋は、江戸時代の庶民教育の機関で、幕府の文教政策と庶民階級の台頭などによって、江戸中期以降その需要に応じて自然発生的に開設され、江戸時代を通じて、その数は全国に約一万校が開設されたといわれ、但馬でも一〇四校を数える(『兵庫県教育史』)。その教科内容は、生活に必要な読み・書きを主として、商業地域ではそろばんが加わるのが普通で、出石の寺子屋で使った教科書も個々には若干の差はあるが、その主なものは四書・五経や『実語教』・『童子教』・『女大学』・『庭訓往来』などで、『唐詩選』などの詩文や『十八史略』・『日本外史』などの史書もみられ、習字には「往来文」や「千字文」が用いられている。

寺子屋の師匠は、武士・僧侶・神官・医師などのほか、名主級の平民が開いたものもあるが、但馬では僧侶が最も多く、医師と農がこれに次ぎ、士・商・神官・修験者・浪人の順である。出石町に開設された寺子屋を『兵庫県教育史』の記載をもとに補充すれば、表96のようである。

以上のほか、領内の出石郡内にも現在の但東町相田の真田大梁(僧)が一八〇九年(文化六)に、一八一九年(文政二)には中山に渋谷又右衛門(士)、一八四四年(弘化元)大河内に桑垣長右衛門(農)、一八五五年(安政二)に平田の姑射得名(僧)、一八六三年(文久三)に小坂の柴田恕平(医)が、年代は不詳であるが中山に藤村義周

表96　出石町寺子屋概要（開設順）

開設者名	身分	所在地	開設	廃止	生徒数	教科ほか
林　恵正	修験者	宗鏡寺町	一七五一年～（宝暦ごろ）	――	――	庚申堂主
林　黙然	〃	〃	一八一八～一八四四年（文政～天保ごろ）	――	男一〇〇　女五〇	〃
上野　玄嶺	医師	伊豆村	一八三〇年（天保元）	一八七四年（明治七）	男二五　女一〇	読み・書き
井上　長兵衛	士	谷山町	一八三九年（天保一〇）	一八七一年（明治四）	男三二　女三四	読み・書き・諸礼
鳥居　音江女	〃（婦）	岩鼻	一八五〇年（嘉永三）	一八七〇年（明治三）	女三八	読み・書き　裁縫・諸礼
内藤　金太夫	〃	――	〃	一八五九年（安政六）	男三〇	――
中沢　東九郎	〃	博労町	一八五五年（安政二）	一八七〇年（明治三）	男二　女六〇	読み・書き・武道
池田　丹治	町人	宵田町	一八五八年（安政五）	一八七一年（明治四）	男四　女一六	読み・書き・算術
寺島　寿心	〃	川原町	――	――	男六　女三九	――
臼田蒼生比古	士	柳町	一八六六年（慶応二）	一八七二年（明治五）	男五二　女三四	読み・書き　算術・諸礼
中村　重首	〃	東条町	一八六九年（明治二）	一八七一年（明治四）	男四一　女一九	読み・書き・算術

（僧）、一八六九年（明治二）に中山の中野弘（医）が、現在の豊岡市倉見にも慶応の末年に斎藤遊仙がそれぞれに寺子屋を開設している。

前記した概況一覧に見られるように、出石町の寺子屋は、城下町の関係から士分が計八名、商二、医一と開設者の多くが士分で、但馬では特異である。開設時期の最も早いのは、庚申堂主林恵正のもので、恵正には俳人で知られる芦田仏白（一七四九～八四年）が学んでいるので、その年代は一七五一～六三年（宝暦ごろ）とみられ、庚申堂を継いだその子林黙然の寺子屋がこれに次ぐものと考えられる。

その他の寺子屋は、全国的に最盛期だった一八三〇～六三年（天保～文久）にかけての開設が多く、そのほとんどが学制発布による小学校の設置前後に廃業している。

寺子屋の生徒は庶民の男子が多く、女子はほとんど無学だったこの時代に、出石では女子の就学が目立って多かった。ことに岩鼻（現材木区）の鳥居音江女の寺子屋は生徒全員が女子で、読み・書きとともに裁縫と諸礼を教授したのは特例であった。谷山に藩士井上長兵衛が開いた寺子屋も、わずかではあるが女子の生徒数が男子を超えたのも注目されるほか、他のほとんどにも女子生徒の就学がみられる。そのほか、博労町に開設した中沢東九郎の寺子屋では、読み・書きのほか棒術と柔道の武道を加えたのも特例である。

3　学　問

儒学・漢学

江戸時代は儒学を中心に漢学が学問の主流をなし、小出・松平・仙石の各藩主時代を通じて著名な儒家や、儒学に堪能な家臣・医家などが多数知られる。教育の項で略述した以外で、

著名なものを補足すれば、小出氏時代にその儒臣で沢庵和尚との交流があったことでも知られる波多玖（通称策庵、一六八八年没）があり、松平氏時代には古文辞学派を代表する儒者太宰春台（一六八〇～一七四七年）が儒臣として仕えていたことがある。春台は号で、名は純、字は徳夫、通称弥右衛門。柴芝園とも号し、信濃の生まれで、松平忠徳が出石藩主時代（一六九七～一七〇六年）に仕えた。その後江戸に出て荻生徂徠に学び、経済を道徳に先行させた古文辞学派を代表する学者として名を成し、著書に『聖学問答』・『経済録』などが知られる。

仙石氏時代を通じて知られるのは、教育の項でも触れた世儒の桜井一門で、まず桜井舟山が挙げられる。舟山は号で、名は良翰、字は子顕、通称を善蔵といい、一七一七年（享保二）領内の養父郡伊佐村に生まれた。上洛して古学派の伊藤仁斎の子伊藤東涯と蘭嵎兄弟に経学を、文を宇野明霞に学んで、帰郷後藩主仙石氏に仕えて儒官となった。著書に『舟山文集』二巻のほか但馬の故事を撰集した『但馬考』六巻等があり、一七五七年（宝暦七）二月二日に四一歳で没した。舟山早逝のため桜井氏を継いだ桜井東亭は、一七四五年（延享二）六月二七日、同じ伊佐村の川瀬道治の二子に生まれ、名を篤忠、字は子績、通称を俊蔵と称した。上洛して古学派の伊藤東所（仁斎の孫）に学んで、仙石氏の儒官となり藩の教学に尽くしたが、一八〇三年（享和三）九月九日五九歳で没した。著書に『道徳大意』・『毛詩合解』・『東亭文集』などがある。東亭には男子がなく、その長女に配して桜井家を継いだのが桜井東門で、一七七六年（安永五）一〇月五日備前是里に生まれ、赤穂の藩儒赤松滄州の養子となり、のち桜井氏を継いだ。東門は号で、名は維温、字は子良、通称良蔵。肥後の高木紫溟に従学してのち京坂に出て、皆川淇園や中井竹山と交わり、江戸の谷本麓谷や佐藤一斉らに

も従学した。たまたま頼杏坪が出府したため、杏坪・倉成滝渚・大窪詩仏らと「不朽社」を結び、その後帰国して仙石侯に仕え、督学兼儒官として活躍し、一八五六年（安政三）六月四日に八一歳で没した。著書には「東門日乗」・「東門雑記」・「東門詩稿」等がある。次代の桜井石門については教育の項で記述したので省略する。

国文学・歌・俳諧　江戸時代は漢学を主流としたが、中期以降になると、復古主義的文学運動の国学が興隆流行した。国学は藩校弘道館でも一部採用されていたが出石藩内にどう影響したかは顕著な事象も認められず不明である。しかし、一般的な和歌や俳諧にはみるべきものもある。

古く山名氏の本拠が宮内の此隅山にあったころ、中世連歌の先達高山宗砌が、一四五四年（享徳三）の政変で主家山名持豊の但馬退居に従って下り、翌一四五五年正月一六日に七〇余歳で没している。そのとき宗砌は自筆の「連歌手爾葉之事」を領内進美寺（現日高町）の観音堂に納めており、のちに「但馬宗砌流」として山名幕下に相伝され、「新撰菟玖波集」に入集した金沢源意や、自選の「五十番連歌合」に宗砌の判を受けた山名凞利らの歌人が出て盛況をみた（金子金次郎『但馬宗砌流の研究』）が、一五八〇年（天正八）の但馬山名氏の滅亡と命脈をともにしたとみられる。

写真291　桜井東門の著書

その後の歌人には沢庵和尚（一五七三～一六四五年）が挙げられる。沢庵は博識多才な禅僧で、禅はもとより書・画・和歌・茶道など万般に通じたが、ことに和歌は公家歌人の烏丸光広と親しく交流し、光広点（読み方の註釈）の「東海百首」はじめ出石の投渕軒での作品「庵百首」・「夢百首」・「梅百首」・「山姥五十首和歌」・「茶具詩歌」・「東海和歌集」・「謫居千首」のほか紀行和歌集の「東関紀行」・「鎌倉遊覧記」・「木曽路紀行」・「東海道の記」など多数の作品集がある（『沢庵和尚全集』）。そのほか詳細は不明であるが、小出氏時代の一六七六年（延宝四）の連歌「安心集」に出石の春昌の名も認められる。

仙石氏の時代では、その家臣山地祐順（一六八四～一七四三年）が和歌を武者小路中納言に学び、同じく増田長隆は冷泉家の門人であった。長隆は、著名な歌人であり国学者でもあった加藤千陰（一七三五～一八〇八年）との和歌の贈答が多かったと伝えられるし、藩士の中には国文学や和歌に長じた者も多く、神谷七五三の妻三笠子のように和歌と書を加藤千陰に学んだ事例も知られる。

出石の俳壇は、一七六四～八八年（明和～天明）ごろを中心に活況を呈し、蕪村（一七一六～八三年）の高弟仏白をはじめ乙総・有橘・馬鱗・長圃・左彦・雪弓らの俳人群が、『蕪村七部集』の「続あけ烏」などに入集しており、そのうち仏白はことに蕪村との交流も深かった。仏白は号で、姓は芦田、通称は六左衛門、如々庵・霞夫とも号し、一七四九年（寛延二）出石に生まれた。家は代々堺屋を称し、城下の材木町で醸造を業と

写真292　霞夫（芦田仏白）の短冊（小幡謹一郎氏蔵）

写真293　可雪(左)・仏白(右)の墓
側面に辞世句がある（昌念寺）

する名主で、仏白は堺屋又七（輝長）の二男に生まれて、庚申堂主林恵正に就いて学んだ。長男右衛門（淳長）が早逝したため家業を継いだが、風流を好んで家業を顧みなかったので、親戚が協議して芦田家の祖休之（久左衛門）の建てた材木町裏通りの如々庵に閑居させて、家事には関与させなかったと伝えられる。

仏白の作品は、蕪村の影響を受けた絵画的な写生句の秀作が多く、蕪村の作品集にも多く収録されたが、一七八四年（天明四）の秋、病床に伏して九月二九日三六歳で早逝し、魚屋町の浄土宗唱念寺に葬られた。墓碑には辞世の「志なば世に冬の来ぬ間と云ひ於けり」の句が刻まれ、隣りには一七三九年（元文四）没の芦田可雪の句「夏ごろもぬるるも安き旅路哉」の墓碑と並んでいる。仏白は表面的世俗的なものを排除して、ことに菊の隠逸を愛したといわれ、没後の一七九六年（寛政八）の一三回忌には俳莚が如々庵で開かれた、一八〇三年（享和三）には追悼句集『きくの主集』が上梓され、遺詠約百首のほか、親交のあった栗本玉屑・松岡青蘿のほか、出石社中小幡菊庵ら多数の句が収録されている。その後、栗本玉屑編と伝える『後菊』と合わせて二巻を「重菊」という。

仏白当時の出石の俳人乙総は、安永ごろの人という以外は不明で、有橘・馬鱗・長圃・左彦・雪弓などの俳人も蕪村の作品集に登場する以外には全く詳細は知られない。その他、天明ごろの坂井華溪が但馬の代表的俳人として挙げているなかに、蕪村門に但馬出石尚古の名もみられる（講談社『兵庫・近世歌俳の人物群像』）。

その他の俳人には「行秋やその月花も夢の夢」の墓碑を残した松岡青蘿門の島屋梧堂（姓は垣谷、一八〇一年九月一四日没）や、栗本玉屑の追悼句もある紺屋菊庵（姓は小幡、一八五八年六月一七日没）が知られ、そのほかにも藩士や町人の間に多数の俳人が認められる。

洋学

江戸時代後期から明治初めにかけて、西洋の文化・学術・国際情勢などに対する関心が高まり、幕末期に興隆した蘭学をふくめた洋学が盛んになり、幕府でも一八五六年（安政三）には洋学所を蕃書調所と改称するとともに、外国語教育に積極的な取り組みを行った。出石藩内でこの動向が最初に確認されるものに、一八〇五年（文化二）のオランダ医学修了証書がある。これは、当時出石藩領で現在は八鹿町伊佐の小出医師（明治以降改姓、当時は桜井）の五代前の当主桜井斎が、長崎に遊学して蘭医ヘルマン・レッケについて二年間勉学し、帰国時に与えられた「但馬の桜井斎君へ。長崎・出島にて一八〇五年H・レッケ」の署名のある証書である（神戸新聞社『兵庫探検』）。

写真294　H・レッケからの修了証書
（八鹿町伊佐 小出格氏蔵）

これに次いで、西洋事物に関心を示したのは藩儒の桜井東門（一七七六～一八五六年）で、自ら長崎に赴いてオランダ人に会い、種々見聞して西洋印刷物、機械などを購入して帰り、また江戸に下って蘭医であり蘭学者の大槻玄沢（号磐水、一七五七～一八二七年）や、洋画家で蘭学者の司馬江漢（一七三八～一八一八年）と交際して、西洋事物の考究を深めている。

また勤王家として知られる多田弥太郎（一八二六～六四年）も幕府昌平黌に学んで帰藩し、藩校弘道館の教授となったが、外国船の来航などを機に海防に志し、師を長崎に求めて、高島秋帆（一七九八～一八六六年）らについて西洋砲術を学んで帰藩し、出石城外の室の代で木砲の試射を行い（一八四九年・嘉永二『御用部屋日記』）、その学ぶところを丹波・丹後から尾・紀・因・越各州の諸藩有志に授け、『海防難議』・『地球小識』など著書も多く、その名声は高かった。

この多田弥太郎とも交流があり、日本洋学の先駆者の一人として知られる加藤弘之（一八三六～一九一六年）は、一八五二年（嘉永五）一七歳で父正照の江戸勤番に従い、佐久間象山の門に入って蘭学や砲術を学び、一年ほどでいったん帰国したが、一九歳の時、再度江戸に赴いた。たまたま象山が幕府より罪を得て幽閉されていたのと、父の大病のため、やむなく帰国した。その後、間もなく江戸に出て、芝の大木塾（塾長大鳥圭介）に数年間学び、一八六〇年（万延元）二五歳のとき幕府の蕃書調所の助教に任じた。このころ西洋哲学・社会学・政治・法律学などの書を読み、蘭学のほか英・仏・独の語学も学び、とくにドイツ語の履修は、我が国では最初でその権威となった。蕃書調所に入った翌年一八六一年（文久元）には、日本で最初に立憲政体を論じた『隣草』を、次いで一八六三年には『交易問答』を著している。その後明治に入ってからは天賦人権思想や、後半にはドイツ流国家主義に立った多くの著作があること、初代東京大学総長をはじめとする要職についたことは第二巻で取りあげられるはずである。

そのほか、藩士の森本淑蔵・横山静太郎（一八二四～六二年）も加藤弘之とともに蘭学を長崎に学んでいるし、大坂の緒方洪庵（一八一〇～六三）の適塾に学んだ出石人橋本艮斎（一八四八年）や堀鯉助（一八五七年）の名

も適塾の門人の『姓名録』に認められ、下って一八七一年（明治四）には藩医池口琴水の孫三泉も適塾に西洋医学を学んでいる。

その他の諸学　和算は、中国伝来の数学を改良発達させた日本独自のもので、戦国時代から江戸初期にかけて築城や土木普請、検地などの必要から次第に進歩し、ことに関孝和（一六四二～一七〇八年）の出現により興隆して、その流れを中心に全国的に和算家も輩出し、和算書も普及した。出石でも江戸後期から明治初めにかけて、藩士や町人の一部にこの傾向が認められる。藩士で棒術重房流の師範だった中村文蔵（盛徳）は、一七八九年ごろ（寛政期）から測量を著名な地理学者伊能忠敬（一七四五～一八一八年）に学び、一八〇〇年（寛政一二）以降に幕府の命を受けて行った、伊能の全国測量に参加している。

写真295　和　算　書（関口勉氏蔵）

和算関流の系譜には、まず中村信成が見られる。信成は通称を次郎兵衛といい、和算家藤田定資（一七三四～一八〇四年）の門人で、一八〇二年（享和二）に江戸西窪の八幡宮に算額を奉納している（肥塚尚文資料）。次いで、その系譜に竹村好博（～一八八六年）があり、その門下に奥田秀貫と竹村節（一八五〇～一九二四年）が知られる。また関流の別系白石長忠（一七九五～一八六二年）の門人に中村義方（一八二四～九三年）の名が認められ、ほかに竹村

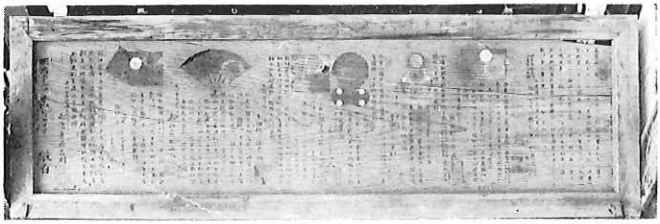

写真296　和算の奉納額（出石神社蔵）

好博の曽祖父竹村好成（一七二三～九二年）も和算家として知られる。好成は通称次助、のち次郎右衛門と改め、一七二三年（享保八）に出石藩士の家に生まれ、『地方元矩』乾・坤二巻を著し、一七九二年（寛政四）に没した。竹村好博は通称喜平太・啓介、のち次郎右衛門と改め字を子学と称した。一八五四年（安政元）の著書『対数表精解』のほか、安政五年に『地球経緯度里数表』同六年に『円中三円術解』ほか数冊の和算書を出版している。奥田秀貫は通称乾右衛門といい、竹村好博の門人で、安政四年の著書に『平測捷経表』がある（肥塚尚文資料）。このほか関流以外では、麻田流の系譜に山添義明と武田辰蔵の名が認められ、一八七九年（明治一二）と下るが、出石神社に奉納した算額があり、ほかに山崎屋茂助の名も聞かれ、江戸後期から明治初頭にかけて和算が盛んであったことが分かる。

そのほか医学では、藩主仙石政辰の侍医で伊藤東涯・柳三省らに師事して文雅にも秀でた杉立章庵（一六九九～一七六八年）や、その玄孫杉立賢が知られる。賢は通称以成、字は好賢、寛政ごろ出石に生まれ、南紀の外科医華岡青州（一七六〇～一八三五年）に学び後、京師に遊学して荻野鳩峯に従学した。江戸詰め中、不治とされていた大木忠右衛門の娘の乳癌を割裁（かっさい）（手術）して全治させ、このことが閣老にも聞こえて都下にその名声が広まり、治療を請う者が多く、乳癌手術の先駆といわれた（『御用部屋日記』）。

4　美術・工芸・芸能

出石焼の土

『日本書紀』巻六の垂仁天皇三年新羅王子天日槍の渡来記中に「近江国鏡谷陶人、則天日槍之従人也」とあり、近江の鏡谷（滋賀県蒲生郡竜王町）から若狭を経て、但馬の出石に定住した日槍集団にも一部の陶工が従い、埴野郷でやきものを生産したと伝承される。しかし、近世後半から始まる現代の出石焼に直接結びつくような古代・中世の生産活動は認められない。

ものの創始

近世の出石焼について当時の唯一で明確な史料『伊豆屋弥左衛門記録』（太田陸郎『但馬出石焼窯元古文書』）がある。この記録の表紙に「天明四甲辰年四月吉日陶器始メテ出石ニテ焼、始利桜尾後云々」の補記があり、本文冒頭に窯元伊豆屋弥左衛門が天明四年に差し出した「乍恐奉願上口上書の覚」がある。それによると、丹波から焼物職人久八がやって来たので、留め置いて試作をさせたところ、ほどほどにでき上がったので、「細見村桜尾の与左衛門畑稲木場から、一部御用林下の山分にかけて新規に本窯を築きたい」と、四月二三日付けで庄屋忠右衛門を経て藩に出願している。また、その時藩に提示した試作品の詳細や、その後の経過などからみて、天明四年を土もの出石焼の創始とするのが妥当であろう。通説では「一七六四～七一年（明和年間）泉屋治郎兵衛、伊豆屋弥左衛門と土焼き窯を細見村内桜尾に築くと言う」とされている（『桜井勉出石年表』ほか）。「伊豆屋記録」によると、藩有地の一部を借用した桜尾の土焼き本窯は、一七八四年（天明四）六月五日に築造にかかり、三間に七間の登り窯のほか、職場などを建てて、同年一〇月一一日に初窯作品の窯出しに成功し、初穂（初めてできた作品）として藩役人や関係者に配っている。翌八五年（天明五）三月に

は藩役人が窯場を検分し、江戸表の藩主に「旅枕花入」を本窯初穂として献上し、七月に帰国した藩主が窯場に立ち寄って、酒代百疋を下賜している。その後、一七八七年（天明七）には焼き物商売と松割り木の払い下げ、他領よりの購入も認められ、同年八月には京都の焼き物師吉兵衛が指導のため到来したり、新たに大坂の職人、やわたや勘七や京職人近江屋吉兵衛を雇い入れて事業を拡張している。

藩の援助もあって、経営が軌道に乗り順調に進んだ矢先の一七八八年（天明八）二月一六日の夕刻、素焼き窯焚き口付近から出火して、素焼き窯と隣接した本窯の覆い小屋や、職場を焼失する事故が起こった。幸いに素焼き中の製品と本窯内にあった「さや」のほとんどは無事であったが、相当の打撃で、このころから借銀の増加がみられる。間もなく窯も再開して、同年六月には京職人井筒屋庄兵衛を召し抱え、八月には製品三四個を津居山の米屋七郎治の船を雇って加賀金沢に向けて販売した。しかしこの販売は、「売方随分程々に帰国いたし」とみえるように、失敗に終わっている。このように窯場の火災に続く販売の不振で、同年一二月には家屋敷や土蔵を担保に借銀している。その翌一七八九年（寛政元）三月に、京職人音羽屋金七を雇い入れたが、間もなく解雇するなど経営の不振が目立ち、藩からの拝借銀も急増している。一七九〇年（寛政二）には、この決済のため、借銀引き当てで蔵入れされていた製品を中心に浜坂村の気多屋文五郎の二百石船で、再度日本海岸を金沢方面に販売した。このときは存外の不景気も重なって、新潟まで販路をのばしたが、結果は失敗に終わった。このように、伊豆屋の事業は藩の厚い援助を受けながらも思うにまかせず、焼成はしても、その製品のほとんどが借銀引き当てに回る状態で、寛政の初めごろには運営が行き詰まって休業の一歩手前にあった。

磁器の創始

現代の白磁で知られる出石磁器の創始は、伝承では一七八九年（寛政元）に二八屋陳（珍）左衛門が藩より金子一五両を拝借して肥前の有田に赴き、数十日間滞在して磁器製造法を習得し、有田職人一人に伊勢参宮を勧めて同道し、出石に連れ帰って石焼きを計画した。しかし資力が乏しく、陳左衛門は丹波園部の小出家を頼って移住したため、有田職人はやむなく出石に留まって伊豆屋の土焼き職人になったといわれている。

『伊豆屋弥左衛門記録』に「石焼之事乍恐奉願口上覚」があって、出石における磁器創始の次第を克明に記録している。この記録によれば、一七八九年三月二八日に肥前平戸領木原村の石焼き職人兵左衛門が出石に来て、四月二六日までの約一か月間伊豆屋に滞在し、焼き物に従事している（「逗留手形扣」）。ちょうどこのころの伊豆屋は土焼き事業が行き詰まり、なんらかの打開策を必要とした時期である。兵左衛門は、磁器生産の最大先進地有田系の職人であり、恐らく伊豆屋にとっては良い相談相手でもあったと想像される。当時の需要からみても、当然土もの陶器よりも磁器製品が望まれたのは明白で、それに必要な原料石の探索が早速に始められた。

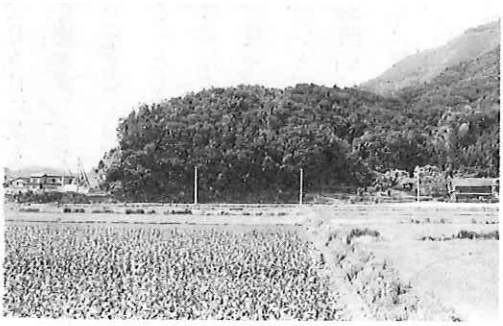

写真297　兵太丸付近（日野辺区）

一度帰国した兵左衛門が出石を再訪したのは一七九三年（寛政五）二月五日で、その三日後の八日には、弥左衛門が準備していた小谷（出石郡但東町）の原料五〇〇匁ほどを使って茶碗一〇個余りを作り、初焼きを

三月八日に試みた。結果「石性（原料石の性質）は良好であったが釉薬（うわぐすり）が不出来だったので、四月五日にこれを焼き直して翌日窯出しをしたところ、ことのほか良く出来あがった。ただ石性が強くて、風われ（焼成中のひび割れ）と思える傷が出たので、次からは原料石に陶土を二、三歩（二〇～三〇パーセント）混ぜれば成功する」とも記している。この記録から、出石で初めて磁器焼成が成功したのは一七九三年四月六日で、その窯は桜尾の伊豆屋窯であったことが明確である。そこで弥左衛門は、この試作品を内々に弓削七郎らの藩役人に見せ、土もの事業で経営の行き詰まっていた桜尾窯を廃止して、新たに城の南西、日野辺兵太丸に築窯したいと、藩に援助を願い出た。ところが、窯の築造が進みかけた時点で、石焼きを直接に試作担当した兵左衛門が、伊豆屋を除外して二八屋と組み製造したいと藩に願い出て、両者が対立する紛争が起こった。伊豆屋は藩に対して「焼き物方を弥左衛門に仰せ付けいただき、窯手入（焼成担当）は二八屋陳左衛門に申し付けていただいては」との妥協案を願い出た（『伊豆屋記録』「石焼之事」）が、折り合わず、間もなく二八屋は園部に去り、兵左衛門も他出した模様で、石焼きをめざして築造された兵太丸窯は、磁器生産に稼働せぬまま推移した（『伊豆屋記録』はこのあと中断し、一八二四年に伊豆屋の焼き物業再開願いの提出まで空白となっている。なお、伊豆屋は一八二六年に窯を福住字浦山に新築して再開したが、一八二八年一二月まで六回の焼成で終わり、桜尾に土焼き（陶器）本窯を創窯以来、途中の休業をふくめて五四年、二代におよんだ業を廃して一八三八年東行した）。

藩窯の開設と民間委託　伊豆屋が土焼き窯を桜尾に開窯して以来、民間産業の保護政策から援助を続けてきた藩も、兵太丸窯の休業状態を座視することは出来ず、一七九九年（寛政一一）にはこの窯を藩有に切り替え、藩士林村右衛門を焼き物方総取締役に任じて、直営に踏み切った。またこのころ城下の柿谷や鶏塚

で、有望な原石（磁器原料）が発見された（『出石志料』）こともあって、行き詰まっていた土焼きを石焼きに改めるべきだ、とする意見が大勢を占めた。そこで二年後の一八〇一年（享和元）に、中老職服部保宜が建議して、この採石地に近い城東の谷山字大谷に窯を移し、同年八月には林村右衛門を焼き物方見廻りに任じて磁器生産を開始した。

その後運営も軌道にのり、創業間もない一八〇六年（文化三）銘のある丹後久美浜町宝珠寺什器の作品からも判明するように、立派な製品が作り出されている。この藩窯の作品は、白磁をふくむ伊万里系染付けを主としたもので、その後一八一六年（文化一三）一一月一八日の『御用部屋日記』には、舅入りの引き出物に、藩主の仙石政美とその奥方から松平伊豆守とその子駿河守に贈った品物が「出石焼花生」と「但馬骨柳三つ組一箱」であったことからも、当時の藩窯作品が高度な水準に達していたことが推測される。

写真298　和泉屋墓地（本覚寺）

この藩窯経営は生産面では直営であったが、その製品販売は市中の茜屋（森島）善右衛門に委任されており、その経営は苦しく、次第に行き詰まり、文政の初めごろ（一説に天保七年ともいう）には茜屋の願い出もあって、直営工場をふくめた焼き物業全般を茜屋に委託する、民間委託経営に切り替わった（文政二年には、生糸専売を中心とした出石藩産物会所が設けられているので、焼き物業を民間に委託しても、その製品は産物会

所で扱う意図もあったと考えられる)。しかしその後の経営も思うに任せず、一八三九年(天保一〇)正月二九日の『御用部屋日記』には次の三様の達しが見られる。茜屋あてには「先年より新町焼き物山(大谷窯)拝借仰せ付けられ年来渡世し来たり候ところ、近年諸国不融通にて昨年当分のところ休山致したき旨申し達し候えども、上にては山方繁昌致させ、焼き物追々国益にも相成るべくよう遊ばされたき趣意に付き、今般和泉屋六右衛門へ相山(あいやま)申し付け候間、同人ととくと申し合わせ出精致し、国産相増し候よう取り計らうべく候云々」とあり、名主小左衛門と同三郎太夫にあてたものには「和泉屋と茜屋の相山とし、共同して焼き物に出精し国益を増すよう努力すること。名主小左衛門と三郎太夫は当分の間山方かかりを申し付け、折々に見廻って両者ほか山方一同が出精するよう」と申し付けている(和泉屋あて達しは省略)。

この史料から、一八三八年(天保九)段階で茜屋は休山に追い込まれ、新たに和泉屋(長谷)の経営参加によって窮状を打開し、国産として重視する焼き物業を推進しようとしていることが明白に知られる。しかし共同事業は一般に難しく、間もない一八四四年(天保一五)七月八日の『御用部屋日記』(この年一二月二日弘化と改元)には「其方ども拝借焼き物山之儀に付き—中略—双方厚く申し置き候ところ、不和合の趣不届至極である。相方(そうほう)実意をもって取り計れば云々」と両者の不和を説諭する達しが見受けられ、この共同経営も間もなく行き詰まった。その結果、最終的には藩工場を両者に折半して、東半分を和泉屋に、西半分を茜屋に払い下げ、それぞれが独立して経営することになったが、その時期は明確ではない。しかしそれは、産物会所の構成員で大地主だった矢根の大石藤兵衛が、和泉屋に資本を投下して経営実権を握る経過から推して、嘉永ごろが想定される(京大人文科学研究所編『但馬における大土地所有の形態と変遷』Ⅱの下)。

民間諸窯の興隆

窯業を重視する藩の殖産興業政策もあって、一八三〇～四四年（天保期）を中心に民間諸窯が勃興する。一八三二年（天保三）三月には、因幡屋（奥田）勘五郎が城下西部の下村（福住）花山に、これと同じころ隣接した下村寺屋敷に鹿児島屋（秋山）粛平（『御用部屋日記』は叔平）が開窯した。また藩窯に近い城下東部の谷山椋谷（むくだに）には、伊佐屋（加藤）忠治が、その隣りの揚枝谷には、七味屋（角岡）平八が相ついで創窯した。このうち伊佐屋窯が土焼きであったほかは、すべて石焼きだったが、この伊佐屋窯も、間もない一八三八年には大黒屋（武田）喜平に譲られて石焼きに転じた。

これら諸窯は藩の焼き物業優遇措置のもとに、城下富商の資本投下による小規模な経営ではあったが、天保期を中心に藩窯（当時は委託経営）・七味屋・大黒屋の東窯群と、因幡屋・鹿児島屋の西窯群が盛んに活動し、出石焼の興隆期を迎えた。その後、昭和に至る最近まで、この地に諸窯が興亡することになった。この天保諸窯のうち、七味屋と因幡屋・鹿児島屋窯は幕末期で休業交替し、藩窯の払い下げを受けて分離独立した和泉屋と茜屋に大黒屋を加えた東窯三山が、明治初頭には稼働した。ことに大黒屋は「永喜山」を称して、自窯の製品のほか他窯分も買い入れて、船便で遠く越後から伯耆の境港までの日本海岸に販売し、帰り荷に出雲石の灯籠や敷石など他国物産を仕入れて、但馬に販売する多角的経営を行い、諸山が興亡する中で明治三

写真 299　昇龍軒銘赤壁図染付花器
（武田ますゑ氏蔵）

○年ごろまで盛んな経営を行った。

諸窯作品の概観

出石焼創始期の伊豆屋窯作品は、数量も少なく、明確な伝世作品も知られていない。窯跡にも物原（不あがり品などの捨て場）はなく、わずかな採集破片や職人の交流などから推測して、京風を中心に丹波系が混入した雑多な趣味的陶器であったと考えられる。その原料土は、窯場に近い桜尾の田ぶち土が用いられ、鉄分を含んでいるので、化粧掛けを施したものが多かったと考えられる。

天保期から幕末までの民間諸窯の作品は、東西窯ともに類似し、花器・香炉・大小皿・鉢・茶碗・徳利・盃台・猪口などの呉須染付けの日用雑器が主で、中には別注品や精緻な染付けのほか白磁も作られた。また七味屋窯などでは、磁器のほか植木鉢やすり鉢などの土もの雑器も焼いている。以上江戸時代の出石焼は、概して倣製伊万里（伊万里焼を手本にこれにならってつくる）の風が強く、その主流は染付け雑器で、現今見るような純白の磁器が出石焼の中心となるのは、一八七六年（明治九）設置の盈進社による改良以降である。

そのほか異質の作品に「入佐山」銘の土もの作品でなまこ釉をながしがけした、現代民芸風な優品大皿が見られ、時代はやや下るが「入佐山下静風亭」銘の精細な赤絵磁器の秀作もある。「入佐」は文化三年銘の藩窯作品にも「於入佐麓」とあり、七味屋窯にも「但州出石於入佐山麓円山作」などの作名も認められる。これは一七九一年（寛政三）改めの『日本輿地路全図』にも、但馬の三名所に湯島・生野銀山と出石の入佐山を挙げるなどしており、出石の代名詞的な意味で、東窯群で用いられた模様である。東窯群にはこの「入佐」銘のほか、大黒屋の「永喜山」・七味屋の「楊溪山」銘があり、西窯群には「向陽山」・「対旭山」・「西幹山」の窯銘のほか、「昇龍軒」などの個人銘も知られる。

個人作家では寺屋敷窯の鹿児島屋粛平が、染付けの名手として令名が高いが、粛平銘の作品は知られず、「昇龍軒」が粛平だともいわれる。そのほか、永喜山窯で幕末期の大黒屋喜平次も染付けの名手だったという（『原色陶器大辞典』）。

その他の美術工芸　一八七六年（明治九）三月、一〇〇〇戸に近い民家と三九におよぶ寺社、二九〇の土蔵を全焼した出石町の大火は、美術工芸品の多くを失い、ことに城下建造物のほとんどが消滅した。現存する建造物では一六九一年（元禄四）に、出石城主小出英安が中興建立した東条区の宗鏡寺開山堂（寄せ棟造り桟瓦葺き・方三間堂で内部に開山大道一以禅師・小出吉政・吉英・仙石政辰の木像をまつる）が近世最古の遺構である。これに次いで年代の明確なものは、一七〇四年（宝永元）上棟の須義神社本殿（荒木区・一間社流れ造り銅板葺き）があり、神社建築では、次いで一七七七年（安永六）改築の御出石（みいずし）神社本殿（桐野区・三間社流れ造り銅板葺き）が知られる。

写真300　願成寺山門

寺院関係の遺構では、一七九三年（寛政五）再建棟札のある総持寺山門（宮内区・一間一戸楼門桟瓦葺き）や、年代は不詳ではあるが古様の龍谷寺山門（三木区・一間一戸楼門桟瓦葺き、旧正眼寺山門を移築と伝承）もあり、一八〇二年（享和二）の棟札がある願成寺山門（東条区・一間一戸楼門入り母屋造り桟瓦葺き）は木組みや彫り物の良い楼門である。そのほか、現在では宗鏡寺本堂脇にある鐘楼（一間一戸楼門桟瓦葺き）も、同寺塔頭

写真301　宗鏡寺庭園

正眼寺の山門を移築転用したものである。

鐘楼では、旧京街道の要衝に位置した経王寺（下谷区）に、一八四六年（弘化三）上棟の二層望楼型で白亜の遺構（方一間・入り母屋造り桟瓦葺き）があり、城下北西部の要衝だった見性寺（松枝区）にも、同種（方一間・入り母屋造り桟瓦葺き）の望楼型鐘楼が残り、鬼瓦に一八五一年（嘉永四）の銘が認められる。

そのほか、明治九年に焼失を免れた宗鏡寺をはじめ、周辺部の総持寺・龍谷寺その他多くの本堂建築なども、その後の改修は別として江戸後期の建造物とみられる。寺社以外の遺構では、旧出石城西門脇（内町区）の長屋門と邸宅のほか、加藤弘之の生家（下谷区）があり、一八八七年（明治二〇）ごろ、町外より移築された福成寺山門（内町区）もある。廃藩時前後の建造物では小御料庄（松枝区）の草葺き住宅や、大手門脇櫓台に建つ辰鼓楼・魚屋区の酒蔵・大橋詰め高灯籠などが知られる。

庭園では、宗鏡寺本堂東脇に池泉観賞式で蓬莱形式の名園がある。入佐山麓を取り込んだ滝口付近の石組みを中心に、亀島をもった江戸前期の作庭で、一六一六年（元和二）に沢庵和尚が宗鏡寺を中興した当時の作庭と伝えられる。池の西側護岸石組みや一部に、江戸後期の改修が見られるが、但馬国分尼寺礎石なども組み込まれた、数少ない但馬の名庭であり、一九七一年（昭和四六）に名勝として県文化財に指定された。また、

龍谷寺の本堂脇庭園も小庭ではあるが、杉苔の美しい蓬莱式枯山水の平庭で、小形の三尊石組みを主に簡素にまとまった、江戸前期における禅風庭園の佳作である。願成寺の蓬莱式庭園も江戸時代前期の作庭であったが、天保期に改修された江戸後期の作例である。

彫刻では、江戸前期の一六七六年（延宝四）京仏師左京銘をもつ、称名寺（松枝区）本尊の木彫阿弥陀如来座像が優作であるほか、中村観音堂の二メートルにおよぶ木造観音菩薩立像二体が、江戸前期の大作である。

絵画には、ほとんどみるべきものがなく、宗鏡寺蔵で寛永二十一年銘（一六四四年）の沢庵和尚自賛の「頂相画」をとどめる程度である。工芸では見性寺の一七六四～一八〇〇年（明和～寛政）ごろの製作になる一切経を納めた八角形の「転輪経蔵」が、華麗な色漆画で仕上げられた優作である。その他、出石神社に所蔵する、大坂夏の陣に仙石秀久の家臣谷津主水が着用したと伝えられる「猿猴の甲冑」と、一六八六年（貞享三）増因明珍式部紀宗介の作銘がある「仙石政明愛用の甲冑」が佳作である。

次に、出石の美術、工芸を作家面から略述すると、まず沢庵和尚が傑出している。沢庵和尚の書はその高徳を伝えて超脱し、近世禅僧の墨跡中ではその第一級に位置し、ことに茶人の間に珍重される。画もまた牧溪（中国宋時代の画僧）や玉磵（中国元時代の画僧）を学び、筆墨の味わいがふかい（『画工便覧』）。沢庵以外書画ともに全国的に著名なものはないが、藩士や医家などで余技に書画に長じた者は多かった。書では、幕府に仕えて書名の高かった佐々木玄竜（池庵）の門人に、金沢昌興（号は塘竜子、一六五五～一七三八年）・斎藤儀右衛門・森井玄親の名が知られ、長谷川妙貞（妙貞流）・神谷三笠子（加藤千陰門人）などの女流の能書家もあった。

絵では、江戸に生まれ土佐派を学んだ専門画家小林碌川（一八三三～一九〇四年）が、幕末の一八六二年（文久二）出石に移り住み、その後養父郡高柳に移住して没している。その作品は但馬に多く、土佐派の流れをくんだ正統的なものから、土地の生活風俗や山水を描いたものなど幅広い表現を行っている。藩士では芹香を号した依田篠介が、幕末ごろから洋画に転じ、京都で活躍して出石洋画の祖といわれる。

工芸では、但馬随一の雄藩でもあったため、その需要から刀匠の活動がみられる。その中心は、法城寺系（法城寺には前後があり、古くは「後醍醐天皇の代、但馬国住人法城寺国光」と『万宝全書』にもみえ、後者は江戸前期である）で、小出氏が出石城主の時、断絶していた法城寺を正弘に継がせ、家臣神西七左衛門に伝来した古国光の秘書を授けて再興させたといわれる。「本阿弥氏家伝」によれば、出石在住の法城寺に次の刀工が見られる。

写真302　法城寺

法城寺正照＝一六一五年（元和）ごろ～、越前守正照と称す。
法城寺正弘＝一六五八年（万治）ごろ～、近江守法城寺橘正弘と称す。
法城寺貞国＝一六五八年（万治・寛文）ごろ～、但馬守橘貞国と称す。
法城寺貞重＝一六六一年（寛文）ごろ～、備中守橘貞重と称す。
法城寺正則＝一六六一年（寛文）ごろ～、橘正則を称し後江戸に移住す。

法城寺貞清＝一六八四年（貞享・元禄）ごろ～、法城寺貞清と称す。
法城寺正弘＝一六八四年（貞享）ごろ～、但馬守橘正弘と称す。
法城寺国正＝一六八八年（元禄）ごろ～、但馬守国正と称す。
法城寺正照＝一六八八年（元禄）ごろ～、越前守正照と称す。

この法城寺の刀工は、小出氏が断絶した一六九六年（元禄九）ごろまでは出石に住し、鍛冶屋村の法華宗法城寺の近くで製作したといわれ、小出氏廃絶後は江戸に移住したという。その後の出石の刀工には藤原（関）兼先が知られ、一七二〇年（享保五）幕府より領内打ち物鍛冶の沙汰があり、時の藩主仙石政房が関兼先の脇差し一腰を、老中久世大和守重之に差し出している（『改撰仙石家譜』）。兼先は美濃の刀工、関兼長の子孫で、明治初年まで出石に在住した（『改撰仙石家譜』）。その他この系統に兼景（元禄ごろ弘原住）・兼吉（貞享ごろ但州出石住）・兼次（元禄ごろ但州出石住）がみえる（『刀工総覧』）。ほかに著名な鉄砲鍛冶国友が、近江より召し抱えられて製作している（『御用部屋日記』）。

その他の工芸では、古来、出石茜染めが有名で、小人町に住んだ筒井長右衛門が一子相伝でこれを業とし、武具類に最も多く賞用されたが、廃藩後絶家した（『但馬考』）。

また、彫り師の地方名工として藤井正之助が知られる。正之助は通称で、名は正

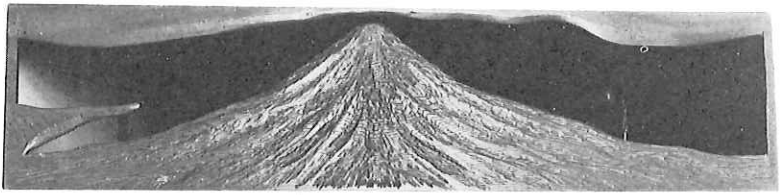

写真303　藤井庄之助の作品（欄間）・富嶽の彫刻（町立史料館）

之、揚雲斎と号し、城下田結庄町に住して工芸的木彫りを業とし欄間・屋台飾り・根付けなどに秀作を残している。名人気質の彫り師で、経済的には恵まれず、雨の日には雨もりがする家の中に番傘をつるして、その下で彫りにふけったといわれる。その後出石を去って、一八六二年（文久二）六月二一日、四六歳で大坂に没した。

茶・花道ほか　出石町教育委員会所蔵の「出石城図」によると、山里郭（くるわ）の近くに瓢形（ひさご）の池のある小庭園と「御数寄屋（おすきや）」が設けられており、城外の俗称「清水御殿」（鍛冶屋区）は「御茶屋」とも呼ばれる数寄屋だった。この二か所付近からは、当時に使用されていたと思われる古様の織部灯籠（キリシタン灯籠）の竿がそれぞれに発見されて、ともに町文化財に指定されている。小出氏時代の茶道で特筆されるのは沢庵和尚で、大徳寺一五三世の和尚は将軍家光・柳生但馬守宗矩・烏丸光広らとの交流で知られるが、ことに茶道では小堀遠州と親しく、茶道系譜では将軍家光とともに、遠州直門である。茶の心なども説いた雑録「結縄集」や「茶具詩歌集」もあり、その卓見は流派を超えている。

この沢庵に、もっとも帰依親交したのが出石小出二代の大和守吉英（一五八七～一六六六年）で、数多い沢庵書簡を通じてみても、その過半近くが吉英あてのもので占められている。また吉英の父吉政の供養をふくめて、沢庵が再興したのが宗鏡寺で、その後山入佐山ふもとの草庵投渕軒も、吉英が沢庵のために設けたもので、軒在住時の沢庵は、書簡などに多く吉政の法号「雲竜院」宗彭を用いている。投渕軒とその生活の詳細については、すでに詳述したのでここでは省略するが、出石在住は一六二〇年（元和六）から二八年（寛永五）までの九年近くと、一六三四年（寛永一一）、一六三六年（寛永一三）、一六四四年（正保元）の三回におよんで、

江戸から帰軒している。この草庵は明治の初めに廃絶したが、沢庵当時の作庭と伝えられる心字の池庭と「投渕軒遺碑」のほか、現在その跡に投渕記念館が建っている。吉英は、投渕軒の沢庵をたびたび城中山里の数寄屋に招いて交会し、この時に詠んだ和尚の和歌や詩文も知られ、茶事に和尚を招いた吉英の書簡も伝来している。

次いで松平氏時代の茶人には、その家臣山崎春斎の名がみえ、仙石氏時代では、歴代藩主のうち仙石政辰とその孫久道が茶人大名として知られる。政辰（越前守、一七二三～七九年）は禅・謡曲・詩文・和歌・俳句・書画にも通じた風流国主で、自作の謡曲「入佐山」や「多地満古理茗家紀聞」などもある。桜井東門の雑記には、宗鏡寺で開いた「茶会記」があり、掛物に雪舟筆達磨（沢庵賛）のほか、沢庵が投渕軒で使用した釜を用い、大井川渡しの川止めのつれづれに作った、自作の茶杓を取り合わせている。また政辰作の「お茶歌」も知られる。仙石家は始祖円覚公（仙石権兵衛秀久）が大徳寺の古溪宗陳に帰依したほかは、代々日蓮宗であったが、政辰はとくに沢庵の遺徳を慕い、遺命して宗鏡寺に葬り、投渕軒の隣りを選んで墓所とし、そのそばに茶室「金粟庵（きんぞくあん）」を建てさせている。

政辰の孫の越前守久道（一七七四～一八三四年）も、三斎流の系譜に名を残す茶人藩主で、家臣にも茶を志す者が多かった。仙石氏時代のその他の茶人では、藩の執政だった杉原常徳（一七一四年～）、同磯野員義（一七四一～一八〇三年）、同堀光寛らが千家直門の茶人で、常徳はほかに漢詩文に長じ、員義は香道・花道にも通じた。千家流にはほかに堀光善・志水宗悟・西沢林碩（号苔庭）・中村如筑（号苔路）・西沢信成・西沢信之（号汲古）らの藩士のほか、本高寺住職の竺日見（号寥々庵、千宗守の高弟）や町人の米屋又三郎らが知られる。

その他、薮内流には諸角昌春・山本旦山・福成寺知門、丹波屋宗社（号循古斎）・伏見屋謙（号峯月）・鍋屋義方（号桃友）があり、武者小路流には内田宗貞に学んだ依田九左衛門らがあった。

花道では、未生真流の開祖守本春甫が著名である。春甫は屋号馬屋、名は善右衛門、生々庵春甫と号し、寛政（一七八九～一八〇〇年）のころ宗鏡寺町（現東条区）に生まれた。春甫は幼少より、但馬にも来駐して教授にあたっていた未生斎一甫について、花道を修めてその奥義を極めた。その後、独自の境地を開拓して未生流から独立して別派を始め、その家元となった。その後京都の有栖川宮家から召されて、その花務職となり、「未生真流」の名を賜ったという。宗家として後進の指導に任じ、その門弟は但馬をはじめ丹波・丹後・京都・播磨・備前・四国・九州にまで及び、一八六〇年（万延元）版刻の『一帆青』上・中・下三巻に掲載された門弟数だけでも、一六〇名を数える。ほかに一八一八年（文政元）春の手記「未生真流家秘書」一巻があり、一八六九年（明治二）三月七日に没した。魚屋の昌念寺に墓碑がある。

写真304　生々庵春甫墓（昌念寺）

その他の芸能では、浄瑠璃三味線の名人に鶴沢清七（勝右衛門）が知られる。『御用部屋日記』によると、「寺坂村伊八の伜、名は泰吉」とあり（松屋泰助の二男ともいう）、上坂して三味線を学び、長門太夫のために弾いて名声を博した。ほかに、小出氏時代に碁師因碩の子、井上普観因碩が城下の八木町に住み、碁の名手のほか、漢詩文にも長じたという。